目次

人類文明の基礎（時言）……本多日生
一、日本人の根本基準…二、現代文明の失態…三、文明と誤れる哲學…四、哲學…五、文明と道德の規範…六、日本人の道德…七、宗教と人生の幸福…八、宗教の義務せし所以…九、日本に於ける排佛の惡學…一〇、佛教信仰の效果…一一、日本人の天職
危險思想に對する警戒……本多日生
思想善導に關する所見……佐藤鐵太郎
謹願陛下……山内櫻溪
人生觀と道德……本多日生
日蓮上人の心血……本多日生
日蓮上人教義綱要……井村日成
濠洲に於ける社會政策……井上清純
記事，報道十數件

第廿四年七月號

我れ是の經を以て國王に付囑し、比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷に付せず、所以は何ん、王の威力無くんば建立すること能はず。

四方の賊來つて國の内外を侵し、兵戈競ひ起つて百姓喪亡す、波斯匿王佛に白して言さく、世尊よ、何が故に天地に是の災難あるやと、佛言はく、大王よ贍部洲大小の國邑、一切の人民、父母に孝せず、師長、沙門、婆羅門、國王、大臣を敬はず、正法を行ぜざるに由る、此の諸惡に由つて是の難の興るあり、若し王の福盡き無道なるときは聖人捨て去つて災難競ひ起らん、大王よ若し未來世に諸の國王あり、正法を建立し三寶を護らば、我れ五方の菩薩摩訶薩衆をして往いて其國を護らしめむ。

（仁王護國般若波羅密多經二卷正大藏第十五套の九）

時言

人類文明の基礎

本多日生

目次

一、文明の根本基準……二、現代文明の失態……三、文明と誤れる哲學……四、日本人の哲學……五、文明と道德の規範……六、日本人の道德……七、宗教と人生の幸福……八、宗教の衰頽せし所以……九、日本に於ける排佛の惡弊……一〇、佛教信仰の効果……一一、日本人の天職

一、文明の根本基準

人類文明の要素は頗る複雜であつて、或は產業、或は政治、或は教育、その他樣々な事柄が集つて成立つて居るのである。併ながら文明の根本に遡つて考ふれば、文明現象は人の心を本として發現して居るのである。而してその人の心を導く基準は何であるかといへば、哲學と道德と宗教との、この三つのものを根本と認めねばならぬ。哲學は智識の根柢を與へるものであり、道德は意思の滿足を得せしむるものであり、宗教は情操を滿足せしむるものである。人間は樣々に心が働いて居

るやうだけれども、三つの方面に纏つて居る、即ち智識と意思と感情との三つである、人間の心の全體が滿足をし、全體が導かれるのは、即ち哲學と道德と宗教との三つの調節である。他の事柄はこの三つから判斷されるのであつて、政治であらうが、經濟であらうが、勞働問題であらうが、普通選擧であらうが、何れも之に對すれば末のことである。勞働運動が道德上より見て不道德である場合には、その價値は認められぬ、又哲學上の根據の無いものだとなれば失脚を免れ得ぬ。如何なる問題と雖もその價値が認められるには、哲學上道德上宗教上の批判に於て及第をせぬ限りには、價値がないといふことになつて行くのである。

二、現代文明の失態

そこで今の人類の文明はどういふ有樣になり居るかといふと、甚だ慨嘆に堪へないので、人類文明の基礎が壞されつゝあるのである。物に驚へたならば、樣々な美しい建物が出來て居るやうだけれども、その土臺を發掘しつゝあるが如くで、即ち文明の建築は哲學と宗教と道德との土臺の上に立てられたものであるに、今日の有樣はその土臺石を掘返してしまふのである、哲學、そんなものが何だい、道德が何だイ、宗教が何だイ」といふやうな譯で、建物の土臺の石を皆が寄つて掘返して思ふ存分にその石を投げ捨てゝ喜んだ時、自分の住んで居る家はガラ〳〵ッと崩れて來て、頭をピシャッと打たれる、その愚劣なる藝當をやり居るのである。現代人は賢明なりと云ふを得べきか、自ら柱の礎を掘返して、その家に打たれて死ぬべき藝當を演じつゝあるものではないか。

三、文明と誤れる哲學

これは實に容易ならぬことであるから、私が今お話する事に就て一つ能く考へて貰ひたいのである。哲學などといふと難かしいやうだけれども、大體はこの天地の大法を考へることである、一切の物はこの天地の大法に支配されて居るのである。低い所で見れば直ぐ分りますが、この春は何人寄つてもこれを冬に戻すことは出來ない、必ずやこれは夏に向つて進んで行く、これが即ち天地の大法といふものである。「ナニ、モウ一遍冬に戻してやる」といつて騒ぐやうな事は、餘程馬鹿な者でなければないであらう。そこで天地の大法がどういふものかといふことを考へる時に、この頃の色々の思想の起つて來る本には、この天地を詠めて非常に恐怖の精神を懷いて居る。社會主義、過激派、是等のものは激しい事をやるけれども、模本は臆病から現はれたものである、「この世ではどうにも斯うにもならぬ、ウカ〳〵して居つたら飛んだ目に遇ふ、一つ足腰の立つ間にやつつけろ」といふのであるから、やつつけろといふ所は元氣が好いやうだけれども、グズ〳〵して居つたらやられるといふ臆病風に襲はれて居る、これは恐怖心より來ると學者は言ふて居るのである。その恐怖心の本を尋いたものは何かといふと、先づ宇宙は恐ろしいものであるといふことを考へた、自然の爲めに吾々の祖先は虐められた、それは大水が出て流されたり、大風に吹飛ばされたりした、自然は非常に怖いものであると云ふ。クロポトキンは或る書物の初めに書出したる文章に「吾々の祖先は如何に自然の爲めに苦しめられ、自然の爲めに弱らされたか、嘗恐るべき自然よ」といふやうな事を書いて居る。この宇宙を眺めるのに左樣な恐ろしいものであるといふ考へを有つと、それから一切の判斷は變つて來る。モウ一つはこの宇宙を見るのに、これは精神も魂も無いものであつて、唯だ大きな機械みたやうなものである、色々動いて居るけれども、そこには魂ひは無いといふやうに、この宇宙を物質的にのみ觀てしまう、宇宙は唯だ機械の運轉あるのみ、そこに何の目的も無い、グワラ〳〵と機械が廻つて居るだけで、機械には何の精神も無いから、手をやつてもチョッと切つてしまふ、鐵の板をやつもチョッと切る、少しも違ひはない、「手を出しては危ない」ナンといふことは機械は思はない、手が來ても構はず切つてしまふ。宇宙の有樣はそれと同じことで機械の運動である、打つかつてやられた奴が損ナンであるといふ風に言つて、この宇宙を物質的に解釋する。モウ一つはどう考へても分らぬといふので、行止つた考になる、「どうも考へて見るけれども餘り廣くてさつぱり分らぬ」といふやうなことで、懐疑に陷り、初めは分らぬ爲めに少し腦つたやうで、首を垂れて、「どうも分らぬ」と言ふやうな風になつて居つたのが、「分らぬならば何をやつたつて構ふ者か」といつて、今度は頭を上げて、暴暴をやるやうになつて來た。この三つは西洋の思想の全體に亙つて居るものであつて、唯物的宇宙觀、或は宇宙は慘忍なりと見て自然を呪ふ所の觀念、或は宇宙は分らぬといふ懐疑に陷つた觀念があつて、それから西洋文明は墳

れて來た。日本にも今色々悪い思想が來て居るが、それはやはりその流れから來て居るのであります。

四、日本人の哲學

それ故に吾々日本人はさういふやうな謬れる哲學に依つてはならぬので、この宇宙には溫かき力が滿ちて居る。「天道人を殺さず」と儒教で言ふて居るので、天は總ての物を育て上げる、草も生えれば木も生へる、萬物皆生々化育して總ての物が成立つて行くのである。日本で申せばこの廣い天地の間には神樣がお居でなさる、吾々の祖先――天照大御神樣は伊勢の大廟に祀つてあるが、その神樣が今もちやんとお居でなされる、鎭まり座ますと信ずる。又宇宙を眺めても、分らぬやうであるけれども人間の眞心を以て考へて見ると、その尊とい意味合が分かる、門は開いてあつても奥の方は能くは見えぬやうであるが、ズツと奥深い所の有樣ぢやといふことが知れる。「畏れ天の命、あゝ穆として已まず」――天といふものは親ひ知ることは出來ぬけれども、併し何にも分らぬのぢやない。塀の外に立つ人が、塀は高いし、何も見えない、彼方へ廻つても此方へ廻つても塀の外で仕方がない、そこで「忌ゝしい、石でも打込んでやれ」といふことになる、併し門が開いて居つて、内に美しい花も咲いて居る、美しい建物もあり、池もある、段ゝ見えるけれどもまだ〳〵深くして奥の果は見えないといふことになると、そこに石を投込んでやれといふやうな考は起らない、東洋の哲學は門を開いてその幽邃なる奥の向ふを渴仰して居るものである。西洋の學問は塀の外に追出されて、内が見えないから忌ゝしいといつて自來を起すやうになつて居る。そこから人間の料簡が、一方は拗けて來るし、一方は和らいで、「これは〳〵とばかり花の吉野山」といふやうに、美しい花に見惚れて行く溫かき精神になつて行くのである。この疑に陷づたる哲學、唯物觀に陷つたる哲學、又天を仰いで恐を懷いて「アヽ怖い」と言ふよりも、「あゝ天道人を殺さず」と言つて悅んで頭を下げる氣分を味はしめて行かない限りには、人類の文明は壞れてしまふのである。

五、文明と道德の規範

モウ一つは道德であるが、その道德といふことは、人間が御寄合で拵へたものではないので、人々の心の中から湧いて來たのである。人間は虎や狼のやうに、道德もなく善もなく、唯だ出合つたら喰ひ合をするといふことに依つては滿足をしないものである、吾々の心の裡には、教へなくとも親は子を可愛がる、子は親を有難いと思ふといふ事が、自然に發生するものである。學校で道德を教へるから道德が出來るのではない、聖人が道德の講釋をするから出來るのでもない、自然に人間その者の本性に於て、親は子を可愛がり、子は親を有難がる、夫は女房を可愛がり、女房は夫を敬ふといふことになるのである。「お前モツとこつちへ寄らんか」と言ふ――それは誰も一緒に坐つたら「こつちへ寄れ」と言はなければいけないと教へるのぢやないけれども、「こつちへ寄れ」と言ふ、女房の方も「左樣ですか」といふやうに、柔かに出來て居る。そこに夫婦の間の一種の道德といふものが發生するのぢや、教へて而して後に出來るものぢやない、自然の本性に於て人間は道德性を有するのである。それは「人は性善なり」といふことを孟子が教へて居る、日本ではこれを「和魂」といつて、人は優しい考を有つて生れて居る者である、泥棒のやうな者でも、自分の女房や子供に對しては優しい考を有つて居るのである、寧ろ泥棒するといふのは、その優しい考を盡すことが出來ない、錢が無くて女房に旨い物を食はすことも出來ないし、自分の腕に何も覺えた藝が無いから、錢を儲けることも出來ない、何とかして子供にも旨い物を食はしてやりたいといふ、愛の働きが間違つた方へ出て泥棒になつて居るので、根性の悪い者であつたら泥棒にはならない「綿はくたばつても棉はぬ」と思へば、泥棒もしないで濟むが、「柔かい着物の一枚も着せてやりたい」といふやうなことがやはり泥棒になるのである。だから割合に泥棒の夫婦といふものは仲が好いといふことを聞いて居る、人間はさういふものである。それ故に人の心の善い所を本にして働き出さなければいかない、その優しい心、明德といふやうな光のある方を先きにして行かなければならぬ、瓶磁玉の方が先きに出て行くとか、拵け根性から出て行くとか、騙してやらうといふ方から出て行くといふことであつたならば、一切萬事が皆な駄目になる、瘡瘢から出發したものは結局に行つて、やはり瘡瘢で終るのであるから、どうしてもうまく行かぬのぢや、優しい精神から出れば一切萬事がうまく行くといふのが、道德の根本だと思ふ。

六、日本人の道德

そこで東洋の方に於ては慈悲の心とか、仁愛の心とか、日本で言へば情けの心といふものを以つて道德の本に置いてある。如何なる場合と雖も情けの心を敵として闘ふやうな運動は罪惡であるといふことが言へるのである。モウ一つ人間の道德は天を眺めた時に、前に言ふ神樣があるとか天道があるといふ優しいものだと思ふ時に、人間の仁心が導かれるのである、例いで見た時に「これは大變だ」といつて驚くやうでは、心の德は現はれて來ないのである。顏を洗うて天を仰いだ時分に「あゝ怖い」と思ふやうであつたならば――丁度監獄に這入つて居る罪人のやうなものであつたならば、決して道德感情は發達しない、顏を洗うて來れば家にはお父さんも居る、お母さんも居る、女房も居るといふので、茶を一パイ飲んでも洵に優しい氣分になる、そこに人間の德性が發達するのである。それ故に政治上の問題でも、經濟上の問題でも、道德上から見てこの優しい考に反對するやうな議論は、全部間違つて居ると斷定して差支ない。そこで國際の關係に於ては成べく戰爭をせぬやうに、戰爭の慘禍に懲りて國際聯盟が出來たのである、勞働運動も實は資本家の橫暴に對して勞働者が自覺をするといふならば、優しい考に於て自覺しなければならぬ、「俺等でさへも斯ういふ優しい考を有つて居るのに、お前達はどうしてこの優しい考が出ないか」といつて、背中を擦つて彼等に悔悟せしめなければならぬ、拳固でどづいて「どうちや」といふやり方は、私はどうも間違つて居ると思ふ。女房の料簡が惡いからといつて、これを毆り倒して治るかというと、毆り倒ほす程惡くなる、人間はをかしいものである、子供が出來が惡いからといつて虐め上げてブン毆ると、段々惡くなつてしまふ。初めは「コラツ」と言つた時分に逃げ居つたけれをも、終ひには「コラツ」と言つても逃げはしない、「何ちやツ」と口答へをする、一つ位頭を毆つても何とも思はぬ、却つて反抗して來る、私の知つて居る小僧にさういふのがあつた、出來の惡い小僧で、師匠が教訓を言うと「何ちやツ」と言ふ、師匠が怒つて箒を持つて背中をビシヤリと毆ると、箒を引たくつて今度はあべこべに師匠に反抗して來る。さういふ譯であるから、どづき廻して人間が善くなつたといふ例は食て之れを聞かぬ、監獄の罪人と雖も酷く虐めれば虐める程惡くなる、不良少年でもその通りである。鞭子でも虐めれば虐度惡くなる。

馬でも非道に扱ふと性が惡くなる。だから資本家でも、虐めたならば益々料簡が惡くなるばかりだらうと思ふ、彼を善くしてやらうといふならば、これを善くする方法がある、どづき上げたり、ピストルを突きつけたりして善くなつた例は、歷史あつて以來曾て無いことである。それ故に凡ての事は優しい考から出て力强くやつて行くことは宜しいが、腹立ちから出てやるといふ仕事はすべて罪惡である、佛樣もさういふ工合にお說きになつて居ります。

七、宗教と人生の幸福

それから次は宗教上の事でありますが、宗教はこれも亦大切なものであつて、人は信仰の心を持たぬといふと、何事も幸福は湧いて來ない。其日その日の出來心でやつて、行くと嬉しい事があつても直ぐ消えてしまふ。諸君が芝居を觀たからといつても、觀て居る間だけで、はゝねてしまへばやはり元の冷たい部屋に歸つて寢なければならない、酒を飲んでも醒めかける時は氣分が惡いし、醒めて考へて見れば錢も減つて居るし、醉つた勢で友達に失敬な事を言つてどぢき廻したりして、嗤怒つて居るだらう、あんな事をするのちやなかつたと……いふやうな事で、味なことは殘りはせぬ、さういふやうな事で人が幸福を得やうと考へて居ると、失敗ばかり多い。あなた方の中でも、「酒を飲めん位ならば働くものか、馬鹿らしい」といふやうな事を言ふ人があるそうぢやけれども、さういふものではない、宗教を信じたならば妙な所に人間の幸福といふものが出て來るのであります。朝顏を洗つて掌を合せた時、何とも言へぬ氣分である、酒を飲んだ氣分どころではない、芝居を觀た氣分どころではない、可愛いゝ女を招んだ時の氣分どころではない、浮い〳〵一種言ふべからざる味ひのするものが、そこに在るのである、實に何とも言へない好い氣分のものがあるので、而もそれは何遍でもやれる、酒だといふと酒屋に行かなければ飲めないし、又錢を拂はなければ飲めないけれども、宗教の信仰は何處でもフツと出て來る、それは訓練しさへしたならば何時でもやれる。一人で寢る時に、あゝ又今夜も淋しい冷たい蒲團の上に寢んならんと思ふ時でも、ハツと掌を合せさへしたならば、非常に好い氣分になつて寢られるのである、その味は言ふべからざるもので、「無限の寶」といつて、何億萬圓にも代へられないやうなものが宗教の信仰である。人類あつて以來今日まで西となく東となく、人は宗教の

信仰に依つて慰められ、導かれて來たものである、その尊い信仰を撫つてしまふと、心が淋しくなつて堪らない、懷中に錢でもなからうものならば、「モウ人生詰らぬものぢや」といふことになつてしまうが、「一パイ飲みたいと思ふけれども錢は無いし、剃身が食いたいと思つても何時も〳〵蒟蒻や大根ばかりで……」といふやうなことになつて、毎日々々不愉快なる人生を送らなければならぬものである。そこに宗教を信ずるといふと、心に悅びがあるから、蒟蒻食つてもそれが美味くなつて來る。春、山にでも行つて躑躅の花を見たり、歌を折つたりして、そうして握り飯でも食へば非常に美味く感ずるやうなもので、心の方が先きに悅んで居るものであるから、何を食つても美味いのである。今日の人は心の方が不愉快になつてしまつて居るのであるから、少々うまい物を食つたつてさつぱり悅ばない、最初の内は諸君でもビールを飲めば非常に好い氣分になつたらうけれども、近頃はビール飲んだつて醉ひもしない、小便ばかり出てどうもならぬでせう。西洋料理食つても初めは美味かつたけれども、値ばかり高くてこれも詰らぬといふことになつてしまつて、何でも終ひには皆な詰らぬといふことになつてしまふ。さうなつたならば人間は日日不愉快な人生を送らんければならぬが、宗教の信仰を一つ得さへしたならば、萬事の缺乏を補ふて餘りあるものであつて、如何なる者もこれに依つて滿足が得られるのである。

八、宗教の衰頽せし所以

さうしてその宗教も西洋の方では色々面倒な議論も起つて居るやうちやけれども、日本に於ては未だ是までの宗教が少しも力を失うて居りはせぬ。今少し衰へて居るのは勝手に捨てたのである、詰らぬから捨てたのではなくして、政治上なりその他教育上なり、一般の者が顧みぬといふことになつたのは、道樂息子が信心を廢めたと同じことで、何も宗教が惡いから廢めたのぢやない。西洋の方のは少し事情が違ふ、向ふは段々研究して行つて見ると、根本が少し淺かつたから、お伽噺みたやうなことになる、基督が生れるのはどういふ風にして生れたか、マリヤといふ女が處女であつて亭主が無い、亭主の無いのにお腹が大きくなつた、亭主の無い子だから神樣の子だ、斯ういふ樣な事を言つて居る。成程亭主が無いのに生れたといへば神樣の子だらうけれども、日本にも亭主なしにお腹の大きくなる女が段々この頃は居るだらう、さうすれば神樣の子があつちにもこつちにもゴロ〳〵生れる譯ぢや。そんな譯だから、それを學問の方から言つて見ると、亭主の無い子だから神樣の子だと言へば、この頃は神樣の子がさらにある譯ぢやといふやうになる、どうも根據が妙な事になつた爲めに、宗教が勢力を衰つたのは事實である。

九、日本に於ける排佛の愚擧

日本では佛教を研究して、左樣な意味があつて、これは詰らぬといふので捨てたのではない、維新の時に書生が天下を取つて、それが爲めに宗教の事を知らないから、戰の騷ぎで佛教を捨てゝしまつた、又教育者などがやはり佛教の事を知らないで捨てゝしまつた、その教育を受けた者は、先生の方は宗教の事を知らないで惡口を言つたのが、あとの者は食つたり飲んだりが忙しい爲めに捨てたといふやうな譯で、別に吟味して惡いから捨てたといふのではない。食はず嫌ひといふか、考へずして捨てたものであるから、考を戻して佛教の經典を披けて見るといふと、非常な立派なものが殘つて居る、この位有難いものはない。調べ上げて詰らなくなつて捨てたのと、うつかりして忘れて居つたのを出して見れば立派なものだといふのとは、どれ位違ひがあるか分らぬ、日本が將來救はれるといふのは此に在る。佛教は調べさへしたならば信心を繫ぐに足るべき根據がある、信仰を導くに足る教義があるといふことは、日本の爲めに最も祝福すべき事の一つである。諸君はどうぞ段々給料も上つて來た譯であるし、時間も多少は餘裕を生じたのであるから、この信仰の事に就てお考へになつて——私は宗旨宗派の技業の事は決して言はない、斯ういふ場合には色々の宗派の人が居るから、どの宗派といふことは言はぬけれども、マア佛教が宜からうと思ふから、佛教の信仰を一つ本當に定められることが善いと思ふ。

一〇、佛教信仰の効果

佛教の信仰が出來るというと、サウ亂暴な事もしないやうにもなるし詰らない考は起らなくなる、手に珠數を持つて居つては、「ヤレ〳〵」といつて人の家へ火を附けるといふ譯にも行かない、「球數の手前も……」といふことになつて、是で大體人間が善くなつて行くものであります。さうしてあなた方が生んで行く子供にも、宗教を教へてさへ置けば大した亂暴な者

にはならぬ、自分が若いからといつて「石ぶつけてやらう」といふやうな事ばかりやつて居ると、子供がやはり「お父さんが石をぶつけるから、俺も火を附けに行くんだ」といふことになる、その時分になつて「コレ〳〵そんなことをしてはいかぬ」と言つてもモウ遅い、親の意見などは聞かずにドン〳〵やり出すことになる。あなた方はやはり家庭を持ち、段々子供を持つて行くのでありますから、その家庭には宗教が無くてはなるまいと思ふ。

一一、日本人の天職

今の世界は宗教を侮つた罰が當つて、壞れかけて居るのである、道德の根本を擲つた爲めにこのやうな混雜に陷つて居るのである、哲學の土臺が分らなくなつた爲めに新ういふことになつて居るのである。然るに日本には非常な立派な哲學があり、道德があり、宗教があることを知つて、西洋が文明の破產をし居る今日に、その尻に附いて行く必要はない、彼が文明の破產に瀕する時、東洋の文明を以て之れを救濟するのが、吾等日本人が人類に對する務めであると信ずる、諸君が日々結構な機械を造つて日本の文明に貢獻せられて居るが如くに、精神上からは又日本に於て善きものを盛んにして世界の文明に貢獻する考を持つて行かなければならぬ。大事の哲學、道德、宗教の事は東洋の方が善いのであり、機械の事は日本が負けて居つたけれども、それも諸君等のやうな、人々に由りて、今に機械の方も負けないやうになつて行くであらう、日本人は元來思慮ある民族であります。昔ては支那の文明を取容れ、印度の文明を取入れて、東洋全體の文明を握つて居つたのである、今又西洋の文明を取入れて、即ち東西文明の全部を日本に於て完成し、世界中の文明を統一して、これを手本にせよといふのを日本より示す事が、日本人の天職であります。一人や二人が反對しても、日本人の天職は旭日が日本より出て西を照すが如く、必ずや日本の精神文明が世界を照すに違ひないと、吾々は深く信じて居るのであります。どうぞ諸君も日本人である以上は、我國の文明が世界を照すが宜いか、他國の尻を舐つてペコペコ附いて行くのが宜いかといふことを能くお考へになつて、唯だ勞働問題一つではない、何事も根本は哲學、道德、宗教より來て居るといふことを忘れぬやうにして戴きたいのであります。（完）

教化

危險思想に對する警戒

（大正九年二月二十八日天晴會に於て）

本多日生

一、緒論

今夕は非常な寒氣であり且つ降雪でありまして、日蓮主義の研究者に取つては、頗る愉快を感ずるのであります。人間の性質は微溫かくなると崇高なる觀念が起り惡いものでありまして、生活狀態に於ても餘りに富裕になつて來れば却て人格が壞はれ始めるのであり、事業に於ても得意の時代に向ふと其處に遊惰の弊を生ずるのであります。特に宗教の事業は、「その貧しき時最も潤し」といふ格言がありまして、何れの宗派も最初開かれる時には反對を受け、味方となる弟子信者は少ないのでありますが、勢力としては小さくとも、精神としては、模範的なるものが、其時に現はれて居るのであります。それが成長發達を遂げますると、その時に腐敗が生じ、義弊の原因が存するのであります。日蓮主義は最も若き宗教であり、前途ある宗教であり、發展の道程にあるものであります。それ故に今日の集會のやうに、寒氣も強い、雪も降る、

從つて參會者も容易ならぬ、殊に交通機關も不充分な場合でありますから、今夕のやうな時に集まる人々は、所謂純潔なる求道者であり、日蓮主義の眞意を味ふには適當なる機會であります。故に自分は今夕の講演を致すのを頗る光榮と存じ、勇氣を鼓舞して所見を申述べやうと決心して居る次第であります。

日蓮聖人の傳にも雪は大變に關係があり、寒さも色々の場合に關係して居るのでありまして、佐渡が寒い所であり、「雪降り積りて晝なほ暗し」と云ふやうな御文章は、遺文中に散見して居ることである。又身延の澤に於ても、一丈餘りの雪が降つたと云ふやうな事が書いてありまして、在山九箇年に亘つて雪に關する御文章が段々あります。又この頃『法難』劇にやつて居る小松原の法難の時は、十一月であつたと思ひますが、雪が降つたといふ記錄があります。左樣にして日蓮聖人と雪とは大事な場合に屢々關係がある。その他の偉人の傳にも雪は關係があるので、義士の討入も雪であるし、彰根浪士の赤合羽事件も雪が降つて居るし、色々雪は歴史上の有名な事實に關係があります。元來雪が人間の心を清くすると か、この混濁なる人生の面目を新らしくするといふことに就ては、非常に面白い意味があらうと思ふのであります。

殊に今日の雪は意味が深いやうに自分は感ずる、單にこの講演會の爲めばかりでなく、日本の現狀に取つて、この雪降り淨めて居る有樣は非常に天意のある所が深いやうに感ずるのであり、殊に今晩は『危險思想に對する警戒』と題して、自分の所見を申上げやうと思ふのであります。この危險思想の問題は、我が國家に取つて重大な問題であり、更に人類全體の爲めにも最大の問題であると信ずるのでありますが、この雪降る寒き晩に危險思想に關して日蓮主義者の立場に於てお話をする事は、頗る時處位を得て居るやうに感ずるのであります。

我國には今日色々の問題が横はつて居り、何れもその問題に熱中する人から考へたならばその事が一番重大であり、一番緊急な事であると叫ぶのでありますけれども、併し今私が考へますには我國に現はれて居る諸種の問題、重大なりとして居る問題は普通選擧の問題とか、或は議會解散の理由の當否とか、或は勞働問題の解決とか、或は物價調節の問題とか、或は外交上の問題とか云ふやうに、色々數へられて居りまして、それは何れも重大な意義を持つに相違ありませぬけれども、併ながら更に根本的なるものは國民思想の問題でありまして、それ等も思想との關係ではありますけれども、根本の思想問題ではないのである。

普通選擧といふことは、政治の一部の形式論であつて、如何に選擧權を擴張致しましても、國民の人格、理想が低いものであり、或は誤つた觀念に陷つて居れば、その結果は知るべきのみである。今日は多數の意思尊重といふことが流行つて居りますけれども、それは絶對の眞理ではないのであります。多數が相當なる智識を得、理想を持つて居りますれば、その多數は尊いものであるけれども、若し多數が誤つた思想に傾いて居るとか、或は暗愚であるとか、病弊がついて居るならば、その多數群衆といふものは、最も恐るべきものであつて、決して尊ぶべきものではない、警戒すべきものであつて尊重すべきものではないのである、それが根本の問題である。然るにその根本問題には觸れないで、卽ち多數の群衆を如何にすべきかといふ根本の問題を捨てて、卒然として多數は神聖である、多數に從ふべしといふ微溫い事を今日は考へて居るのであるから、普通選擧といふが如き事は、今日の場合に於ては決して重大な問題ではないのである。選擧權擴張の當否といふことは、一個の議題とはなるけれども、決して根本の問題でもなく、左程に差迫つて居る問題でもないのである。

勞働問題は如何と云ふと、これも相當な價値ある問題には相違ないけれども、我國の現狀に於ては勞働問題の如きは左程行き詰つて居る問題でもなく、勞働者の生活狀態が一般の國民生活より憐れな狀態に居るのでもない、他の一般生活に比例して考へたならば勞働者は寧ろ幸福の位地に置かれて居るのである。故に生活問題としても勞働問題が一番差迫つて居る問題ではない。況してや生活問題が日本に於ては全體として左程に差迫つて居る問題ではない、それよりももつと重大な根本の問題がある。さういふ事も國情に照して、實際を研究せずして、唯だ一人が生活問題は最も緊急な問題だと言へば、それに雷同附和するのであつて、頗る輕卒な態度であると思ふ。

又物價調節の問題にしても、これは無論相當手を下すべき事で、この點に就ては現政府の態度は吾々も遺憾に思ふのであります。併し素人の考へであるから、如何にしても調節し難いのであるかも知れぬが、もう些つと熱心に方針を立てゝ物價調節を實行しなければならぬと思ひますが、併ながらその問題が一番重大な問題ではない。現政府も相當それには方法を講ずると言つて居る、唯だ餘りに熟考が長いといふか、決斷が足らぬと云ふか、「實行します」と言つて居る其處に力の無い點に於ては、現政府は確かに贊成が出來ないと思ひますけれども、それが根本の問題ではない。

又外交の問題、外交上失敗があると叫んで居りますが、或る意味に於ての失敗はあるかも知りませぬが、併ながらその失敗といふのは、政治運動の中に、所謂攻擊せんが爲めにその材料を求めて言うて居るやうな事柄で、必ずしもそれが非常な失敗ではない。同じ失敗としても、小なる失敗であらうと考へるのであります。斯の如く色々の問題が世間では喜々として絶叫されて居るけれども、眞に國家の前途を思ひ、人類の幸福を思ひ、之を根本的に考へ、之を實際上に訴へ、前途を見通して本當に決定をしやうとする上から見れば、第二位、第三位に屬する問題に捉はれて、第一位の根本問題に對しては、甚だ不熱誠であり、方向が立たぬと考へるので、この點を最に遺憾に思ふ。

然らば何を指してそれ等の問題よりも更に根本的なる問題と云ふかとならば、即ち危險思想に對する警戒に於て遺憾なき方法を盡すことであつて、その點に就て少しは考へを持つ人もあらうけれども、その警戒の程度、それに信ふる用意が不充分であり、不熱誠である點に於て私は遺憾に思ふのであります。廟堂の諸公も、在野の政黨も、一般の國民も、總てが斯の眞に自覺すべき重大なる問題に對しての觀察及び決心が非常に淺いと思ふのである。一番警戒すべき重大な事柄を淺く考へ、後に廻して、さうして輕い問題の爲めに相互に鬩うて居るといふ事は、所謂本末を顚倒して居るのである、本末顚倒といふことは非常に重い事である。その事が善であつても、小さき善に囚はれて大きな善を打つ場合、小さき忠義に囚はれて大きな忠義を忘るゝ場合——基に譬へて見れば、三目でも取られたならばそれは差引き六目の差を生ずるといふ事は無論であるけれども、始めから終ひまで二目三目の石取りばかりを考へて、全局の勝敗を忘れる者を、之をへぼ碁といふのである。どんなへぼ碁でも二目三目の石を取り合ひする場合に、それが取られても宜いと思うて居る者は居らぬのである、けれども部分に囚はれて全體を忘れ、小さき利害に囚はれて大局の打算を忘るゝ者、之れをへぼ碁といふのである。であるから思想の問題でも、政治の問題でも、國家の經營でも、そのへぼ碁的の二目三目の問題に捉はれて、大局を忘れると云ふことがあつたならば、それが即ち大失態であらうと思ふのである。甚だ言ひ過ぎたことであるけれども、これは私自身が申すのでは無くして、即ち日蓮聖人の大智見に導かれて申すのであつて、所謂「佛日を以て國土を照す」と言はれたが如くに、日蓮聖人の指敎に導かれて我國の現狀を照す時、彼等が一番重いと思うて居る事は輕い、彼等の忘れて居る所に一番重いものがあると云ふ事を喝破せられると思ふ。それは危險思想に對する警戒を以て最大事と示さるるであらう。

現政府が一昨日（二月廿六日）議會を解散した理由を見ても、その點を擧げて居るので、即ち無論の二つの理由として、一點は昨年の議會に改正をした衆議院議員選擧法を、一度も行はずして又改正するといふことは、議會政治の信用上に於て出來ない事だと言つて居る、併しこの點だけならば政府與黨が多數であるのだから、その議案を否決し去ればそれで事足りるので、解散を要しないことである。第二の理由は名を普通選擧に藉りて、それに伴ふ運動若くはその普通選擧を要求する根底に於て、我が社會の現狀を打破し、階級を否定して、惡平等に奔らんとする所の危險性が萌して居るから、是れは寧ろ解散をして國民の判斷に問ひ、且つ國民に一種の警告を與へる方が宜いといふ考へで解散をされたのである。「警告」といふ言葉は使つて居らぬけれども、判斷といふのは優しく云ふからであつて、これに依つて國民の思想の惡化に對する一大警告を與へると云ふので解散したものだと思ふ。さうすると兎に角危險思想の恐るべき事は、現政府に於ても自覺して、政治運動、勞働運動が危險思想を幇助するに至り、誘發するに至つては容易ならぬ事として、一番重き理由に於て、兎に角帝國議會を解散して居るのであるから、我國に於

ては危險思想の問題が遂に議會を解散する迄に至つて居るといふ事實は現政府が證明して居る。又反對黨である憲政會の有力者も言うて居る、それは逆に言うて居る、普通選擧を實行しないならば、又現政府が何時までも政權を握つて居るならば、國民は必ず惡化して危險思想に趨くであらうと斯う言うて居る。政府者は普通選擧運動をこの儘にして置いたならば危險思想に趨ると言ひ、反對黨は現政府が永く續いて、普通選擧を許さなければ危險思想に奔ると言ふ。どちらも趨ると云ふので、どつちにしても思想の惡化を認めて居る。右を行つても溝の中に嵌り、左を行つても溝の中に嵌ると云ふのであるから、憲政會の言ふ所是なれば、今日の儘にては日本は危險思想に奔るのである。政友會の言ふ所是なれば、議會を解散せずに置けば日本は危險思想に奔るのである。どつちから見ても弃りたがつて居るといふ點に於て多くの政治家がこれを認めて居る。國民黨はどう言ふて居るかといふと、犬養總理の言として新聞の報ずる所に依れば、今度の解散のやうな暴擧な事をやれば內亂が勃發すると言つて居る。これは危險思想といふ言葉は使つて居らぬけれども、內亂が勃發するといふ事を斷言するに於て是れ亦どうも容易ならぬ事を認めて居る。大隈侯の意見として新聞の傳ふる所も犬養氏と相似たやうな不穩な事を言つて居る。さうしてそれを心配して言ひ居るのやら、面白がつて言ひ居るのやら——面白がるといふと語弊があるけれども、あゝすれば斯うなる、さうすれば危險思想に走るといふやうな事を言つて、政黨の軋轢の具に供して居るが、これ等は幾分その思想を警戒する爲めに考へて居る事でもあらうけれども、眞面目にこの國家の大事に對して言うて居ることゝも思はれないのである。政爭の具に供して互ひに言ふのであるから、その判斷が全然違ふのである。一方は今の勞働運動或は政治運動をこの儘に放任して行けば、それに伴うて人心が危險化するといふ、一方はこの要求を容れんければ危險化すると言つて互ひに爭ふて居るのであるが、何れにしても危險化するといふ事を言ふに於ては一である。

其處で日蓮主義者の立場はどうであるかといふと、私は政治家が何れもそんな事を言うて居るに依つて、思想が危險化するものだと思うて居る。「そんな事を言うて居る」といふのは、政爭の具に供するの嫌ひあるを云ふ、これは政黨政派を超越して國家的の大理想から、丁度敵國に對して戰ひを開く時分に於ては政黨の軋轢を超越して日露戰爭の時に廣島議會に於て決定したが如くに、政黨の如何を問はず、この危險思想に對する警戒は擧國一致の態度に出づべきものである。今や危險思想に對する態度に就ては、左樣に黨派に依つて觀念を異にして相爭ひ、政爭の具に供するといふ事が、國家を危きに導く所以であらうと考へる。斯樣な問題を政權爭奪の具に供するといふことは、國家に忠實ならざるものであると私は言ひたいのである。これは一國の大事、思想の大事であつてそんな黨派觀念に依つて互ひに責任を轉嫁するといふやうな、不眞面目なる態度に出づべきものではない。故に私をして言はしむれば、彼等は自ら堂々たる政治家を以て居るけれども、眞に國家を憂ふる點に於ては疑ひ無き能はずである。

それで吾々日蓮主義者は、斯の如く混沌たる時代、何れにこの大事を託すべきかを知らざる時に方つては、日蓮聖人が自ら國の柱を以て任ぜられたが如くにあらねばならぬので、日蓮主義者は唯だ世の成行きを傍觀して居るとか、人の言ふ事を批評して居るやうな、無責任な態度であつてはならぬ、何處までも自ら方針を極めて、先覺者を以て任じて、天下を指導しなければならぬと考へるのである。それは日蓮主義の本領として、上に釋尊を戴き日蓮聖人を戴き、法華經を奉じ遺文を奉じて、その光明の下に吾々は世に立つのであるから何も恐るゝ事はない。大隈侯如何に偉人なりと雖も日蓮より小なる者である。彼等の言論如何に價値ありとするも法華經よりは不徹底のものである。今日の如き大事に臨んでは唯だ目前の左樣な人々にのみ委かすことは出來ない、更に偉大なる根據に基いて、國民の思想を導かんければならぬと信ずる。茲に於て自分はこの危險思想に對する警戒といふことを、充分に國民の間に宣傳をしなければならぬと思ふが、併し如何なる主義に於て態度に於て之を宣傳するのであるかといふ事に就て、日蓮主義の立場より聊か卑見を開陳して見たいと考へるのであります。

それで話の順序として、第一に危險思想なるものゝ主義はどういふものか、第二にその危險思想の勢力はどういふものであるか、第三にはその主義を實現すべく彼等の執る方法は

どうであるか、第四にその主義宣傳の目標を現在何れに定めて居るかといふ事を考察して、それに對する日本國民の用意如何、又日產主義の指導意見如何といふ事をお話して見たいのであります。

二、危險思想の主義

私の知る範圍に於ては、この危險思想は卽ち「社會主義」とも言ひ、「ボルシェヴィズム」とも言ひ、「破壞主義」とも言ひ、「虛無黨」とも言ひ、色々の名前を附けて居るけれども大同小異である。これは多く「溫和派」と「過激派」といふ名に依つて分類されて居るが、溫和派といふのは議會政治を通じてその主義を實現せんとするが故に、之を溫和派といふので、過激派といふのは直接行動と言つて、議會の方に信賴しないで、卽ち多數民衆が爆發彈を以て破壞運動をやる、直接にやるといふので之を「直接行動」と言ひ、前者を「議會政策」と稱して居るのである。今のボルシェヴィズムなるものは議會政治を否認して居る、日本に於ては普通選擧を叫んで居るけれども、普通選擧の運動の中に危險化する者があるとしたならば、普通選擧は無駄事となつて行くのである、一步進むに於ては直ちに直接行動に移るのである。「與へざるが故に移る」といふのと「與へるが故に移る」といふのと、どちらにも理由がある事で、與へない場合に移つたこともあるが、與へるが爲めに直接行動を誘發する事も事實多くの例があるのである。左樣な譯で唯だ自分の運動の手段方便として、「與へよ、與へなければ危險化する、さうして見せるぞ」と云ふやうな態度を執つて見たり、「與へれば危險化するから」と云つてそれを禦がうとするやうな手段を取つて見たりして、互ひに鬩ぎ立てる間に次第々々に民心が荒ららいで、遂にボルシェヴィズムの勃興を援助するならば、これ等は併せて國家の罪人である。であるからこの直接行動とか議會政策とかいふやうな事を言つて居るのは、始めは違ふやうだけれども、自分の研究では溫和派も過激派も無い、同一の目的を持つて居るものは同じく恐るべきものとして觀なければならぬ。何故かといふと主義そのものが眞に恐るべきものであるからである。

主義とは何ぞや、簡單に言へば彼は歷史的に發達したる國家の組織を破壞し、

社會に存する所の種々なる階級制度を打破し、さうして全く新らしき社會を造り出さんとする者である。歷史的に發達したる國家の組織を破壞するといふことはどういふ事かと言へば、法律に就て現在存する所の總てを認めない、憲法も認めない、その他のあらゆる法律を一時に全廢する、法律を認めない結果は政府を認めない、役人を認めない、權力階級を認めないといふ事になる。故に之を「無政府主義」とも稱し、「破壞主義」とも云ふので、直ぐ其處に移つて行くのであります。

非常に大きな事實のやうであるけれども、法律か暴力かといふ點になると、法律一つを無視する時、總ての法令は効力を失ふのである。「法律ナンといふものは駄目だ」といふ、巡査が制裁しやうとしても肯かない、例へば議會で巡査を捕つかまへて謝罪らすとか、或は大隈侯の銅像の前に於て探偵を臺の上に乘せて詫らすとか云ふやうな事をやれば、その一角に於ては既に法律の効力は無くなつて居るのである。それがもう一步進んだならば法律ナンといふものは何の効力も無い、暴力が勝つといふ事になるのであるから、暴力か法律かといふ時に直ぐ國家は破れるのである。國家が破れると言つても別に人間を殺す譯でもなければ、國をどうする譯でもない、その國家が執つて居る秩序、法律に於て定められて居る所の秩序が失はれた時、卽ち國家は破れたのである。故に軍隊が出て暴民を鎭壓しなければならぬ所は、其處だけは國家が破れて居るのである、それが出ても治まらぬといふ事になれば全然破れたのである。軍隊が出て鎭めなければならぬ時は、一時その時は國家が破れて居るのである。人間の身體で言へば腫物が出來て膿が出るとか、或は切つて血が出て居るとか、兎に角其處だけは破壞して居るやうなものである。

其處で國家を破壞すると言つても何も面倒な事はないと彼等は考へて居るので、法律を實行する所の警察官なり裁判官なり、さういふ者の權力が及ばぬやうにしてしまへばそれで宜いといふ事である。其處で多數の力を賴んでその法令が行はれぬやうに、巡査が來ても大勢で取卷いて溝の中に投り込んでしまふとか、裁判所で裁判を開かうとしても大勢で押しかけて裁判所を打壞はしてしまふとか、裁判官は秩序が保てゝ居る時には被告に向つて「其方」と言へるけれども、「その方もこの方もあるものか、生意氣言ふな」と言つて裁判官を

攫まへて函の中に入れてしまふと云ふやうな事になればそれでお終ひだと云ふので、唯だ恐るべきものは軍隊一つである、軍隊を除くの外は多數の暴力に依つてやる時には何でもないものである。警察官であらうが裁判官であらうが何でもない、唯だ最後に國家を維持して居るものは軍隊のみであるから、其處で彼等は色々の手段を以て軍備を縮少し、撤廢する事を第一に要求する。これは國際關係に於て軍國主義を捨てる爲めであるといふやうな事を言つて居るけれども、その實は他日暴動をやる時分に軍備の無い事を希望するが爲めに、其處で軍備を先づ縮少し、國民をして軍隊を重んずる觀念を失はしめ、軍人の功績を罵らせる、「何だ奴等、軍服ナンぞ着て、馬鹿者め」といふやうな觀念を與へる。これが抑々國家を破壞して行き居る順序として現はれて居るのである。

それからもう一つ同時にあるのは在來の經濟制度を打破して行くので、今日までの富の分配、所有權を認めない、第一土地の所有權を破壞し、財產の所有權を破壞し、建物でも何でも總べて所有權を認めない。その甚しきに至つては身體に着けて居る衣服でも時計でも悉く所有權を認めない、「お前は衣服を二枚着て居る、俺は寒いから一枚寄こせ」と云つて引ッ剝いで行く、「お前は大分長い間時計を持つて居つたから、些つと此方へ寄こせ」と言つて引つたくる。さうして之を奪ふとは言はない、互ひに持つべき物を向ふが長く持つて居つた、俺の方の分を奪つて居つたからそれを取返へすといふ、即ち「回收運動」と彼等は稱して居る。「吾々が汗を出して働いた利益を彼等が掠奪して居つたのであるから、吾々はそれを回收する」と云ふのである。其處で「無政府共產主義」といふ名が附いて居るのであるが、併しそれは形ある所に於て早く見えるから言ふのであつて、財產の制度を破壞して銀行の金を掠奪するといふことは直ぐに見える。又法律の命令に服しないといふことも直ぐ形に見えるから、それが一番恐ろしいと思ふのであるけれどももつと酷い事を過激派は考へて居るのである。

それは何かと云ふと社會の道德を殆ど全部無視する。寧ろその道德を無視するのみならずその反對の意見を主張する。その最も著しいものは道德としては禮儀を守るとか、恩に感ずるとか、或は秩序を守るとか云ふやうなことであつて、

所謂仁義禮智信といふやうな事が道德の先づ本體である。名前は違つても人に優しくして行くとか、爲すべき事は爲るとか、頭を下ぐべき者には頭を下げるとか云ふやうな事に現はれて居るのである、古今東西と無く道德の本體といふものはさういふものである。所がその道德を根本から破壞するのである、さうして新らしき道德は反抗にあるといふ、反抗といふのは刃向つて行く事である。服從とか尊敬とかいふ事は最も賤しむべきものであつて道德ではない、それは罪惡であるといふ、人に頭を下げるといふ事はいかん、刃向ふのが道德であると最も强く彼等は主張して居る。これが勞働運動に現はれては資本家に對して又刃向ふやうに養成するのである。政治運動と現はれては官憲とか國權に對して民衆が反抗運動をやるのである。それが新らしき道德として考へられて居る、その位であるから所謂古い道德と稱するもの——大體日本で言へば君に忠義をするとか、親に孝行をするとか、又大勢の者の爲めに犧牲になるとか云ふやうな事は全部否定するのである。犧牲の道德、服從の道德、忠孝の道德、そんなものは三文の價値も無い、寧ろ罪惡ぢやと言ふのである。それは總べて反抗から起つて居る觀念であるからさう云ふことになるので、自分の利益を主張し、自分の生活權を主張し、自分の幸福を主張することが宜しい、それに刃向ふものは打碎いて進むのである。其處に過激主義なるものは國家を破壞し、經濟制度を破壞するといふけれども、それよりももつと强く人心を指導する所の善良なる道德を根本より破壞し去るものである。

それからもう一つは宗教の信仰および教義的感化を悉く蹂躙し去るのである。これは何故かといふと、宗教は人に遷かき觀念を與へる、さうして又犧牲の精神を教へ、色々世の爲めにするとか、人の爲めにするとか、自分を抑へて人を助けるといふやうな事を說くから、左樣なものはいかん、又社會事業をやつて救濟の事に努力すると云ふやうな事はいかん、そんな事をして優しくして呉れるから、反抗の道德を養成するのに害がある、もつと性惡くやつて呉れ、さうすれば肝癪玉を起して反抗心が起り易くなる。坊主見たやうな者があつて、優しい事を言つたりするから、洵に生半熟でいかん、もつと殘忍にやつて呉れ、救濟事業などの事業張りみたやうな

事は御免蒙ると言つて、慈善事業であらうが、信仰の宣傳であらうが、悉く之を罵る。それから一人一個みな平等といふ事を主張するが爲めに宗教の賢哲を罵る、偉人といふ者を認めない、所謂一人一匹だから蟲が一疋五厘ならどれも是れも五厘だ、旨くとも不味くとも五厘の蟲は何でも五厘だと言つて、賢哲ナンといふ者は認めない。孔子が言うたナンといふ事は怪しからぬ、孔子も立ン坊も同じ事だ、孔子が言うたナンといふからいかぬ、何故「俺が考へた」と言はぬかと云ふやうに、孔孟の教に對しても其處に賢哲を罵るから、賢哲の格言教化を全然無視するやうになつて來るのである。

尙ほもう一つは、廣く申せば全部の精神的文明を罵るのである。精神的文明とは人が音樂を聽いて樂しむとか、或は詩を詠んで樂しむとか、謠曲をうたつて樂しむとか、花を見て樂しむとか云ふやうな崇高なる觀念、道德でも宗教でも文學でも、さういふ高い思想といふものは悉く之を否定する、「花より團子」主義であるから、「花も、へちまもあるか、團子ぢや」と云ふので、何でも「團子を呉れ、食はして呉れ」といふやうな事ばかり言ふのであるから、總べて精神文化に盡したる人は、不生產的のもので無駄なものである、そんな事を考へて居る暇に鍬を乘つて耕やせ、筆を折つて鍬を乘れと云ふやうになつて、非常に落漠たる文明になる。其處で筋肉勞働者といつて馬鈴薯を作るなり、鐵を叩いてカチン〳〵言はして居る人間が、一番えらいといふ事を極端に主張する。「他の者は食客ぢや、俺等が作つた物を食つて居るぢやないか、文學も宗教もない、自分で耕やして食はんやうな奴は悉く食客だ、偉らさうな顏をするな」と云ふやうになつて來る。

左樣な譯で表面は簡單に國家を破壞し、經濟制度を破壞すると言つて居るものであるから、宗教家や又道德家、軍人といふやうな者は、自分等には關係は無いと思うて居るけれども、實はさうではないので、凡そ今日の文明を構成して居る事は、宗教、道德、軍備、經濟、精神文化、その他あらゆる長き人類の歷史に於て發達したる文化の大切なる要素を、悉く蹂躙し破壞せんとするものである。狂暴も亦甚しいもので、惡魔と雖も斯樣な惡魔は他に無いのである。昔から恐るべき物の事を毒蛇、虎狼よりも恐るべしなど云ふが、蟒蛇とか虎とか云ふ物が出て來た所が、迚もこの長き人類の文化を嚙み破るといふことは出來はしない。どんな暴惡な人間が蹂ね廻つた所が、この偉大なる精神文化、人類の文明を破壞することは出來ない。唯だ過激思想のみは唯今申すやうな順序に依つて、一切の文明を葬り去らんとするものである。故に彼等は「過去を考へるな」と云ふ、その過去といふ中には一切の文明が這入つて居るのである、さうして「明日を考へよ」といふ、今日相當な學者も左樣な口眞似をして居るが、善くも惡くもさういふ口眞似をする程、それ程實に淺間しい者である。吾々は必ず過去を考へなければならぬ、過去を忘れるやうな者は馬鹿者である、昨日と今日と聯絡あつて始めて人である。文明を開拓して行くには、唯だ向ふばかり見て居つて、過去の系統歷史を考へるなと云ふやうな事を云ふ、それ程愚な論は無い、然るに滔々としてそれを言ふのである。

三、危險思想の勢力

先づ主義としては左樣に恐るべきものであつて、さうしてそれを實行した結果はどう現はれて居るかといふと、その適例は之を露西亞に見れば明かである。嘗ては佛蘭西に一度この主義を行ふたことがありましたけれども、やはり非常な恐慌時代を生じて、何等其處に幸福もなく平和もなく秩序もなかつたのであります。併しそれは僅かな期間にして、直にそのやうな社會は軍人の爲めに破られた、大きな鋸を拵へて、「貴樣のやうな社會主義を唱へる者は生けて置く必要は無い、悉く頸を切つて仕舞ふと」いふので、ズツと並べて置いてチョリッとやると、一遍に百人もの頸がコロ〳〵ツと落ちる。之が爲めに十五年程の間は社會主義は殆ど全滅したと云ふのでありますが、併しそれ程酷い事をされても十五年も經つと亦忘れて、再び危險思想が勃興致しました。それから蔓延したので佛蘭西が滅である。さうして遂に露西亞にも傳播し、亞米利加にも蔓延まつて、今日まで來て居るのである、今日露西亞がやつて居る事は、日々の新聞の報ずる所、若くは實見者が歸朝しての視察談が聽かれるのであるから、露西亞が過激思想を實行した結果はどういふものだといふ考察は、確にでも出來る事である。その結果として羨ましいと思ふやうな事は一つも無い、彼は國民に對して今尙ほ生活の保障を與へ

ることも出來ない、世界に對して信用を恢復することも出來ない、唯だ國内に暴力を以て暴れ廻つて、過激派政府は存續はして居るけれども、その治績は一として見るべきものは無いのである。

故に過激主義が恐るべきものであり、その結果の憎むべきものだといふ事は明白だと思ふ。それを今日の學者は「分らぬ」と言ふて居るけれども、丁度歴史家が天下周知の事實でも、自分がその人の書いた物を見なければ承知が出來ぬといふやうな話で、日蓮聖人の龍の口の法難を否定した學者もある。刀が折れなかつたといふやうな事ならば、どうでも宜いけれども、「龍の口の法難は無い事ちや」といふ。どういふ譯ですかといふと、「俺が見た書物の中にはそんな事は書いてない」といふ、その實幾らも見ては居らぬので、日蓮聖人の遺文の斷片を二つか三つしか見ないで、俺の見た書物には無いから、どうしても無かつた事だといふ。丁度そんなやうな譯で、今學者が「どうも過激主義が善いか惡いか僕には分らぬ」といふ。それは成る程能く研究して見ないから分らぬのだらう、學者が分らぬといふのは「自分は調べて居らぬから分らぬ」といふのだけれども、それを素人が聞いて「あの位の學者でも分らぬといふから、過激派には大分善い所があるのかナア」と思ふ。併しさうではない、その實は「過激主義の事を調査すべき材料が無いから、僕には善いとも惡いとも未だ判斷がつかぬ」、と云ふだけの事で、學者としては尤な事である。それを以て「惡いと能う言はぬから善い所があるだらう」と誤解するけれども、之をもつと平たく言へば「俺はその事を調べて居らぬから分らぬ」といふ事である。左樣な事を學者は言ふのである、併し常識に於て露西亞の今日の狀態の惡るべき事位は判斷が出來る、それも分らぬと言へば何事も分らぬことになつてしまふ。それは懐疑的の思想に捉はれたならば、「親の頭を叩いても善いか惡いか分らぬ、惡いと言つた所がそれは因襲的に左樣な事を言ふのだけれども、親父だつて譯の分らぬ事を云ふ時には、懲しめの爲めに一つ位頭を叩いた方が、家庭平和の爲めに宜いかも知れんちやないか」といふやうな事を以て分らぬと言ふ。丁度「强姦何が故に罪ありや」といふやうな事を加藤弘之博士が言ひ居つたが、あれはやはり懐疑的の思想である。其處で同じやうにこのボルシェヴィズムに對しても、懐疑的の病氣を持つて居る先生達が、「イヤ分らん、一寸惡いやうに見えても、それが世の中の進歩かも分らん、露西亞が世界に後れるといふけれども、却つて順調に行き居るのかも分らぬ。英吉利などの方が弱つてしまつて、今に露西亞に閉口するかも分らぬ、年限は五百年か千年か後れるかも知れぬけれども、併し進化の道程に於てその方が宜いのかも知れぬ」といふ。さう云ふやうな無責任な事を言つて居るものだから、過激派に對しても國民を警醒すべき活動が起らぬ、さういふ呑氣な無責任な、何でも分らぬと言うて居れば宜いやうに思うて居る學者には、思想の事は委かして置くことは出來ない。やはり今日自分の理性、自分の觀念を充分に遂げて、夫ふ限りの方法を盡して、さうしてこれは惡いと思ふものは、自分が判斷を下して「惡い」と言はなければならぬ。「今は惡いと思うても、十年も經つたならば惡くないとの考へが起るかも知れんから、マアそれ迄考へなければならぬ」といふやうな事で、今日躊躇して居るならば、十年經つて今度「惡くない」と考へた時にも、「イヤこれは又考へやうに依ると惡いのかも知れんから……」といふやうになれば、一生死ぬまで一言も云へはしないちやないか。それが慎重なる學者であるならば、學者は棺桶に這入つて頭に釘を打たれる時まで默つて居るより仕方がない。左樣な事を以て穏健とは言へない。人間は凡そ年齢も極つて居るし、自分の理智の發達の程度も極つて居るから、それは非常な高い所から言へば間違つて居るかも知らんけれども、併ながら眞面目に研究した結果、これならば是なり、或は否なりと判斷を下したる事は、それを表明しなければならぬのである。

私はこの點に於ては一點も疑ふ所は無い、過激派の如き者は人類共同の敵である、國家唯一の敵であるといふ結論を明白にして、何も今日の學者の研究の結果を待つ迄もない、過激主義は恐るべき惡思想なりと斷定し、國民に鮮明なる意識を起さしめなければならぬと思ふ。

思想善導に關する所見

（四月二日名古屋市國技館に於ける自慶會支部創立大會の講演）

佐藤鐵太郎

私は今御紹介になりました佐藤であります、今日は御當地に參りまして、この光榮ある御會合に臨みまして、自分の信じて居ります所を述べるといふことは、誠に光榮の至りであります。充分に自分の所信を盡したいと思ひますが、何分多用でありまして、今晩八時十五分の汽車で東京に歸らなければならぬので、取急ぎますから大要申上げやうと思ひます。

別段に前以て申上げることはありませぬが、この思想といふものは、皆樣もお考へ遊ばす通り、何事よりも大切なるものであります、吾々軍人が斯くの如き場合に於て演壇に立ちまして、自分の所見を述べるといふのも、善い思想を持つた國民でなければ立派な軍隊は出來ませぬ、隨つて吾々は立派な思想を持つた所の國民を土臺として、吾々の軍隊を造らうといふ考から、烏滸がましくも皆樣の前に立つて所見を申上げる次第であります。自慶會は申すまでもなく「自慶安住」といふことが御趣意であります、此處に横田大審院長から今日の祝辭に代へて贈られました扁額にも書いてありますが、「自慶安住」といふことは申すまでもなく目出たいといふことである、この世の中は誠に有難い世の中である、自分の致して居る事が誠に有難い、滿足であるといふことである。「安住」といふことは滿足してそこに憂が無いといふことであります。さういふ思想を本會に於て我が國民一同に傳へるといふことは、國家の爲めに誠に目出たいことであります。

私は別段に是れと申して立派な智識がある譯ではありませぬがこの頃思想の事は斯くあらねばならぬと考へまして、いろ〳〵の方にお目に懸つては申して居ることがありますので、それを申上げて見たいと思ひます。思想といふものは要するに生活の狀態から起きて來るものでありませう、即ち吾々がこの世の中に居つて、總ての物の影響を受けて變化致しますが、その原流と申しますか、源といふものは、この天地自然の力と吾々の關係、吾々の祖先と吾々との關係から起きて來るだらうと思ひます。この考へから見ますると、思想といふものは考へやうに依つて色々分れるやうに思ひます、まあ斯ふも考へられる、吾々の先祖達はこの世の中に樣々で生れて來て、何も着る物もない、誠に困つた狀態であつたに相違ない、そこで山の崖のやうな所を掘つて窟穴を造り、それから又いろ〳〵の方法を以つて魚を漁つたり、獸を獲つたり、鳥を捕へたりして生活をして居つた。斯の如き不便なる狀況であつたと同時に、この天地の間にある所の大なる力と鬪うて、この力に打勝つべく勉めなければならぬといふ境遇に在つた。さうしてその後の吾々の親々は同樣の苦みと同樣の努力を以つて今日まで參つたと考へて見ることも出來ませう。

この場合に於てはどういふ考が出るかと申しますと、吾々の親々から吾々に不完全な物を與へたから、吾々はこれを充分なものに仕上げなければならぬ、吾々に對してこの天地間の大なる力といふものは迫害を加へて來た、又吾々に向つて戰鬪を挑んで居る、この戰ひに向つて吾々は大勝利を得て、總ての天地自然の力を征服しなければならぬ、斯ういふ考が出るだらうと思ひます。これは一應尤のやうであります、ちよつと考へますと勇ましいやうであります、けれども又これを能く考へて見ますと、吾々の祖先は何も無い不自由な生活をしながら、尙ほ自分の子孫を愛惜せんが爲めに、完全なる幸福を得せしめんが爲めに色々の事を御心配下さつた、御自分樣の事には無論關係があるけれども、子孫の爲めに善かれと思つて色々の物をお造りになつた、そうして一寸も休まずに非常に勉强して下さつた爲めに、今日の如く世界が出來たのである。又この天地間の力といふものも、前申したやうなものではなくして、吾々を抱擁して、慈悲の觀念を以つて吾吾を育てゝ下さるのである、その證據には勉强さへすれば何物も悅んで下さる、如何なる事でも天は吾々に與ふることを

吝むものではない、非常に親切な慈悲に富んだものである、斯うも考へられる。この二つの考は吾々の頭腦に始終閃ふて居るのであります、世界の各民族の思想も大抵この二つから出て居るやうであります。前に申した方の思想は、詰り物を敵として是れと鬪つて、それから奪ひ取るといふ意味であります、祖先のものは不完全である、別に有難く考へる必要はない、不完全なものを與れた、斯ういふ考であります。後に申した方の思想は、洵にこの天地間の御恩といふものは有難いものである、惠深きところの日月の力に依つて吾々は生育して居る、世の中では稍々もすると、飛行機などが通りますと空中を征服したなどと申しますけれども、決してさうではない、この天地自然の大きな空間の慈愛の下に、勝手に天の領分を通らして貰ふのであるといふ考が起るのであります。即ち前の方の考は萬事物を奪ぎ取らうといふ考であります、總てのものに打勝つて向ふのものを自分に取つて來るといふ考であります、後の方の考は總べて物を與へるといふ考であります、これは餘程注意すべき點でありまして、人類の思想の根蔕になるであらうと思ひます。

今日は戰爭も漸く治まりまして誠にお目出たいことであります、西伯利地方に未だ少し心配すべき狀態の事が見えるやうでありますけれども、是とても小さなことであります、世界の平和は既に成立つたと申しても宜しいであらうと思ひます。即ち武器を以ての戰爭は目出たく終結致しましたけれども、思想上の戰爭は、此の度の大戰の前に比べますと更に一段の激しさを加へて參つたのであります、これは申すまでもなく皆樣もお考へのことゝ考へます。さうしてこの思想はどういふ思想であるかと申しますと、世界を通じて先刻申しました、第一の思想、即ち何事に依らず自分を主張して、何物にも構はず自分の方に掴ぎ取らう〳〵といふ考であります。この考は非常に人の心を險惡ならしめ、色々の過激なる思想となつて現はれ、誠に悲慘なる境遇となつて吾々の眼に映ずるのであります。これは果して目出たいことでありませうか、斯の如き有樣を續けて居つたならば、何時になつたら溫かい幸福を得ることが出來ませうか、お互に嫉み合して、まるで佛道で申す餓鬼、修羅のやうな狀態になつて、これをこの世にして置きましたならば、吾々の幸福といふものは何時得られるでありませうか。吾々は溫かい境遇にお互に生活したいのであります、人を恨ます、人にも怨まれず、お互に溫情を以て、兄弟の如く睦み合ひたいのであります、今のやうに奪ひ取り主義を以て立ちましたならば、何時になつて吾々の目的が達せられるでありませうか、これは吾々日本人の最も深く考へなければならぬ所である。大風呂敷を擴げるやうでありますけれども、我國の今日の狀態を本當に立派にする爲めには、志お高く、而もその意氣込が强くなければならぬのであります、大風呂敷を擴げると申しても、これを空に考ふべき時ではない、吾々の天職、吾々の抱負は何處までも大きくなければなりませぬ。

そこで私の所信を申上げたいのは御國に關係することであります。諸君に假に問ひます、世界には獨立國が幾つあるでありませうか、諸君は必ず答へませう、數十を以つて數へる位であると。私も幾つか存じませぬが、兎に角數十箇國の獨立國があるとお答へになりませう、併し私はこれに反對を唱へます、眞の獨立國といふものは我が日本國一ケ國である。(拍手)斯う申したならば、佐藤は又大きな事を言ふと思召すかも知れませぬが——手をお打ちになつたお方は御誤解でありませうが——そのお方のために一言申して見ませう。氣の毒であるけれども假に英吉利を取つて見ます。英吉利といふ國は昔ブリトン人といふ民族が住んで居つたのを、羅馬から攻められて亡んだ國であります、それから後丁抹人から亡ぼされました、それから又ノルマンデー人から滅ぼされました、數回亡國の悲みを嘗めたところの國であります。佛蘭西でも獨逸でも、如何なる國でも、世界の各方面にある所の國〻は、皆悉く數回滅びた所の國〻であります。現在の有樣だけを見ればこそ數十の獨立國がありますけれども、之を歷史的に考へて見たならば、悉くみな亡國であつて誠に情けない狀態を見た國であります。我が日本國は之れに反して、天照大御神、若くはそれ以前より今日に至るまで、一回も獨立の體面を汚したことのない立派な國であります。即ち空間的に申したならば數十の獨立國がありませうが、時間的と空間的と兩方寄せて見ましたならば、日本國一ケ國より外には獨立國は無いのであります。(拍手)吾々の祖先は斯の如き立派な國を打立てゝ、さうしてその後の五十代か百代か、何代

か知りませぬが吾々の親々は、この立派な國を守つて、吾々に下さつたのであります、誠に有難い祖先、有難い親々であります。斯の如き光榮は吾々の最も感謝しなければならぬ所であると同時に、之を子孫に萬々年傳へて動かないやうにするのが吾々の責任であります。（拍手）斯の如き大なる意味を含んだ所の國民が、國の内の小さな爭ひにコセコセするやうな事では相濟みませぬ、（拍手）最も偉大なる志を以て、最も偉大なる事業を世界に向つてやらなければならぬ。

けれども日本人は果して善い思想を世界に宣傳するの資格がありませうか、これは問題であります。如何に日本國は唯一の獨立國と威張つて見ましても、日本國民がそれだけの資格がなければ空威張であります。この事に就て簡單に申して見ますれば、これは私が始終申すことでありますが、國の成立から考へて見ます。世界の各國は、例へば此席にお居でになる所の皆樣はみな他人同志であると考へます、この他人同志が集まつて唯だゴジャ〳〵して居ると、そこに始終我儘の爭ひが增へませぬ、始終喧嘩をして居る、そこでは是ではならぬといふので纏つて一つの國を成したといふやうな風の國々であります、即ち銘々の權利を主張する所の考が本となつて、お互に相爭つてもそれが極端に至らざることを希望するが爲めに、義務心といふものを養つて、この權利と義務との調節に依つて平和を得つゝある所の國々であります、今日の國家として存在致して居るものは皆これであります。でありますから權利義務の思想が旺盛ならざるを欲しても得ないのであります。即ち權利義務の思想あつて後初めて國は安全に、その國民は幸福の狀態を續けて居るのであります。併しながら權利の思想は主張し易いが、義務の觀念は動々もすると衰へ易いものであります、誰でも權利は主張致しますけれども、義務を主張したといふことは餘り聞きませぬ、例へば千圓の稅を納めて居る人が、「自分の財産收入は三千圓納めるのに相當して居るから、來年から稅を三千圓にして下さい」といふやうなことを言ふたことは聞いた事がありませぬ、（笑）義務の方は成たけ少くしやう、權利の方は成たけ主張しやうといふので、始終喧嘩し合つて居るのであります。これが爲めに人々の間は冷たい關係が自から出來まして、本當の溫かい生活といふものは出來ないのであります。

然らば國家は斯の如きもののみであるかと申しますと、如何にも世界は斯の如き國のみである。併しながら茲に自分を省みて見ますと、日本國は是とは違つて居ります、日本國は吾々の祖先から子、孫、曾孫といふやうに段々繁茂致しまして、人數が多くなりまして、その内に朝鮮人も這入つたことがあり、支那人も這入つたことがあり、色々の國民が參りましたけれども、一ト度も内輪揉めの爲めに根本から崩れたこともなく、他の國から侵されて亡びたこともなく、その僅家族的の樣子をズット續けて來た國であります。西洋の諸國は或は内亂の爲めに亡び、或は外寇の爲めに撃滅ぼされ、洵に悲慘な狀況を繰返して居つて、到頭元の親類同志も他人になつてしまつたに拘らず、日本は神代の昔から今日まで、ズット父母と子供の關係を維持して、今日まで參つて居る國であります。斯の如き國の間には如何なる思想が根本となるかと考へて見ますと、即ち親の慈愛と子供の有難いといふ報恩の心、この二つのものが結びついて道德の本源を爲して居るのであります。即ち日本國の道德の本源は、慈悲と報恩の關係である、親の慈悲に子供の報恩、君の慈悲に臣下の報恩、兄の慈悲に弟の報恩、斯ういふ工合に恩義を以つてお互に結びついて居ります。他人のやうな關係になりますと、往々にして權利義務の思想を發達した形跡がないでもありませぬが、要するにこの間までの日本人の思想といふものは、慈悲と報恩の關係であつたのであります。これは西洋の國民と思想の根源を異にして居る所の最も顯著なるものであります。先帝陛下の教育に關する勅語にも

我ガ臣民克ク忠ニ克ク孝ニ億兆心ヲ一ニシテ世々厥ノ美ヲ濟セルハ此レ我ガ國體ノ精華ニシテ教育ノ淵源亦實ニ此ニ存ス

と仰せられた、即ち忠孝は國體の精華である、而して教育の淵源は實に此に存する、これは　先帝陛下より吾々に下さつた所の有難い大御言葉であります。この忠孝といふ考は、吾々の祖先三千年の前から今日までズット傳へて來た所の、慈悲と報恩の關係に依つて出來ました所の立派な思想でありまして、權利義務といふやうな關係から出來たのではありませぬ。素より權利義務觀念といふものは非常に尊いものであります、これが無ければ人々の動みがありませぬ、各々競爭

してこそ進歩するのでありますから、この思想は決して惡いものではないのであります。けれども權利思想に囚はれますと、義務思想を閑却致します、權利義務思想のみにして溫かき慈悲報恩の關係を忘れますと、冷たい關係になつて來ます。吾々の幸福は溫かい所から出るものでありまして、冷たい所から出るものではありませぬ、世の中の不良少年少女といふやうな者は、嚴格な家庭から出ることが多いさうであります、嚴格なる家庭からは不良なる者が出さうもない譯であるけれども、嚴格なる家庭から出ることが誠に多いのであります。これはどういふ譯かと申しますと、冷たい嚴格から出るのであります。親が慈悲の笞を以て子供を打つ、如何に嚴なりと雖も慈悲の涙を以つて打つ所の笞には、不良少年などが生れて來るべき理由は無いのであります。それが繼母の手に慘たらしい扱ひを受けて、冷酷なる境遇に育つとか、或は父なる人が家を外にして、まるで家の事を構はずして遊んでばかり歩く、放蕩無賴で身を崩すとまで行かぬでも、兎角家の內に溫かい味がない、お母さんは始終心配をして居らつしやるといふやうな、さういふ境遇の家庭には、如何にお父樣が嚴格に遊ばされても、その子供は不良少年になり易いのであります。人間の本當の幸福といふものは溫かい味に依つて出て參るもので、冷たい所からは出ぬのであります。（未完）

△各地の法華經要文講義　大月十七日愛知縣一宮町、聽衆二百五十名△同十八日四日市市圖書館、聽衆三百名△同十九日名古屋市常慈寺、聽衆八百五十名（此の日主催者側大に準備に努む、炎暑の候に關らず、又同夜他に普選同盟婦人同盟等の大講演會數ヶ所に開かれしに關はらず、聽衆滿堂の盛況を見たり）△同二十日同所聽衆九百五十名大本堂に滿つ△同廿二、廿三日大阪市、聽衆各三百名△同廿五、廿六日神戸市聽衆、各三百五十名△同廿八、廿九日京都市妙滿寺、聽衆各三百名

△教學財團評議員會　四月十四日午前十時より財團本部に於て第十四回評議員會を開催す。理事長代理中村彌之結氏假議長席に就きて開會を宣し、西村吉右衛門氏議長に當選、議事に移り、豫算外金光孝顯師の事務報告あり、大正八年度基金部並に常用部決算を承認し、次て大正九年度常用部豫算を議決して正午閉會。出席議員石川顯榮中村彌之結西村吉右衛門村上萬三郎部山庄兵衛萩原日道須山義三郎岡友日斌笹川日道師又委任狀提出者林藏一氏外十二名なり。

因に本財團理事監事評議員の各役員は全部任期終了に就き目下改選手續中にして、本日新役員全部決定せらるゝ筈なり。

照顧脚下

（名古屋市山岸製材所に於ける講演）

山內櫻溪

私は『脚下を照顧せよ』といふ講題に就いて暫くお話を致します。これは漢字で書縮めますと「照顧脚下」の四字になる、能く禪宗などで使ふ言葉で、言葉は諸所で使つて居りますけれども、私のお話する意味は全然世間に使はれて居るのとは違ふので、平つたく言ひますと足許を顧みよといふことになるのであります、モウ一つこの意味に言換へると、自覺せよ——國民的自覺とか或は信仰的自覺とか、言葉はいろいろありますが、詰り自覺せよといふことであります。

昔の人が、人を責むるの意を以つて己を責めよ」といふことを言つて居る、人の事は能く責め易いが、併し人を責める心持を以つて己を責めるといふ人は世の中に少い、今日の必要は人を責むるも可なりであるが、人を責めるならばその心を以つて同時に能く己を責めよ、斯う古人も言つて居りますが、現在に於て最もこれが必要であると私は感じます。自覺乃至は脚下を顧みるといふことは、始終自分の周圍に向つて比較を取らんければならぬ、自分一人だけが果して宜いか、四面の形勢はどうであるかといふことを靜かに顧みて、深く研究をするといふことが是れから生じて來るのであります。あなた方が今日やつて居られる事柄が、果してこの周圍のものと比較してどうであらうかといふことを顧みて見ると、これは自分の方が善いとか、或は先方の方が良いとかいふことが分つて來る、そこで初めて自分の立場といふことが明かになつて來るのであります。又日本の國民としては周圍を顧みなければならぬ、隣國の支那はどうであるか、モウ一つ東北に連つて居る西伯利はどうであるか、又一方西南の方面の印度地方はどうであるか、遲羅の地方はどうであるか、斯ういい

ふ自分の四周を顧みて、彼等の狀態と我とを比較して見るとどんな工合であるかといふことを、第一に考へなければならぬ。モウ一つ廣く推及ぼして見ると、今日の亞細亞はモウ亞細亞だけの亞細亞ではない、印度や西伯利や支那の亞細亞ではない、世界全體の關係を有つて居る亞細亞である、或は亞米利加の勢力がどの程度まで加はつて居るか、英吉利の勢力がどの程度まで加はつて居るかといふ事柄が、亞細亞問題に於ても第一に考へなければならぬ要點になつて居ります。現にこの會社が製材をやつてお居でなさる、この製材がどういふ方面に輸出されて居るかといふことを承つて見れば、熱帶地方の印度或は暹羅、その外南洋附近にまで、有らゆる熱帶方面に輸出されて居る、そのあなた方が造つて居られる材木が、直に日本國といふ鉾を打たれて居る。日本の製材が來て居るといふ事柄は、世界各國の素人環踏の中に批判をされる、比較をされる、斯ういふことになるのであります。場所は熱田の附近のこの村でおやりになつて居つても、その關係する所は世界各國人の目を引いて居る、利害の關係等を引いて居るといふことになつて居るのでありますから、その頭で自分を顧みると非常に愉快でもあり、又責任も重いといふことが分つて來るのであります。

從來日本の人はどうも自分を顧みるといふことが乏しいと思ひます、又他と比較するといふことも、唯外觀の上に於ては比較が出來たか知らんけれども、モウ一つ根本に觸れるといふことが、有らゆる問題に於て缺けて居るのが、一般識者の認める所の缺點であります。第一今日世の中に騒いで居りまする政治の問題にしても、現在の狀態そのものよりも進んだ政治といふ根本の觀念が、海外諸國との比較が取れなくてはならぬ、海外各國の政治の根本はどういふ根本を以てやつて居るか、日本はどうであるかといふ比較が取れて來なければならぬ。名前は立憲國で、英吉利がやつて居る立憲も、亞米利加がやつて居る立憲も同じことであるけれども、實質根本に於て日本が各國と比較をした時分に、違ちる點はあるまいかといふことを考へて見ますと、實に比較にはなりますまい、立憲の意義が完全に行はれて居ない、彼を凌駕する程の立派な立憲國であるといつて日本は誇ることは出來まいと思ひます、即ち根本に於て注意が行屆かぬといふことが現はれて參ります。唯外觀に於ては同一であつても、根本に於て彼よりも一頭地を抜いて、如何にも世界の特等の立憲國であるといふに至つたならば、初めて日本が世界各國に政治上に於て誇ることが出來るでありませう。隨つて經濟上に於ては、始終世界を相手とする所の總ての商業工業は、海外との比較を取ることが必要な事は明かであります。その海外各國との比較を取つて、是れは注意を拂はんければならぬ點である、此處に今まで心附かなかつた點があるとかいふことを顧みると、初めて日本人のやる事柄が一段意義を成して來る、そこに活きた心持が含まれて來るといふことになります。更に政治經濟ばかりではない、日本人がモウ一つ根本に顧みると、今や五大國といふ文明國の一に數へられて居るが、文明の素質といふものは一體どんなものであるかといふことを、大いに顧みなくてはならない。文明とは一口に言ひますと、政治が整つて居るだけが文明ぢやない、經濟が整つて居るだけが文明ぢやない、陸海の軍備が整つて居るだけが文明ぢやない、教育が整つて居るだけが文明ぢやない、モウ一つ是等の總ての人生に對する働きの原動力が無ければならぬ、この原動力があつて初めて政治、經濟、教育、あらゆるものが活きて來るのであります。

そこで私が思ひまするに、その原動力は何であるかというと、一口に申すと信ずるといふ、健全なる信念といふことが、あらゆる物の原動力になるのであります。例へばこの市内を走つて居る所の電車を見ましても、あの電車のモウ一つ根本は何であるかといへば、あれを動かす所の動力は電池である、電池があつて電車も走れば電燈も點れば、その他の動力を供給することも出來て居るのである、その根本は電池である。それと同じやうに我國に於てのあらゆる文明の素質の由つて來る根本の電池は何であるかというと、所謂信念であります。この信念は惑じつかの學問や理窟では窮ひ知ることが出來ませぬ、あなた方が第一何を信じて行かれるかといふと、人としては父や母の言ふ言葉を疑ふ者はありますまい、例へば茲にあなた方の父母から、明日面會をしたいとか或は何か用事があるから、御主人の方から暇を貰つて歸つて貰ひたいといふ電報なり、手紙なりが來た時分に、これを疑ふ人はありますまい、親として子を欺くやうな親は決してない、故に子としては赤心を以てこの通信を疑はない、信は此にある、これはモウ理窟ぢやない、所謂電氣の相應ずる如くに感應する、そこに疑ひといふものは除けてしまつて居るのであります。

そこで日本人の立場、日本の根本の美點といふものは、最大信念といふものが昔から日本人の頭の上に加はつて居るといふことが、日本の大特徴である。それは國體に對する觀念、至尊陛下に對する觀念に於ては、外國人などの思ひも寄らぬ

所であります、吾々が　天皇陛下に對する觀念は、今申す子が親に對すると同じことで、これは學術上から來たのではない、權利義務の關係から來たのではない、又算盤上の利害得失から來たのではない、吾々七千萬の臣民が　至尊に對するのは一つの信念である。それが三千年――モウ一つ言つたら歴史のあらん以前よりも、國民と　陛下との間は信念に依つて結ばれて居るのであります。それは今日お互に　天皇陛下の萬歳を三唱する、あの萬歳の聲の中には、外國などの言葉や學術で解剖することの出來ない信念が籠つて居るのであります。又例へば諸君の友達が西伯利にでも出征するといふ時に之れを見送る時分でも、イザ汽車が出發する、見送り人は是れで別れを告げるといふ時分に、「萬々歳君萬歳」と言つた一聲は、千萬言の文章を書いたり、半日語り合つた言葉よりも以上の心持を籠めて送るのである、送られる方もその心持を受けて、帽子を振り或は半巾を振りなどして別れを告げるのであるが、これは信念と信念とに依つて最後の別れを告げたのである、此處が信念であります。この尊き信念といふものは――同じやうな事は外國にもあるだらうけれども、幾千年我が皇室の御祖宗以來結晶されて居る國柄は、外國にはありませぬ、是が日本國民の特長である。どんな問題でもこの大信念の下に立つたならば葛藤はない、理窟はない、理窟を言ふ力は消え失せてしまふのである。有名な

何事のおはしますかは知らねども
かたじけなさに涙こぼるゝ

といふ歌が西行法師の歌として遺つて居りますが、それに違ひない、どういふ理窟だといふことはない、唯だ琴なさに涙こぼるる――實に能く日本の國民と至尊陛下との觀念を詠み得たと私は思ひます。吾々がこの大信念を養ひ、この信念を以て萬事のことに當るといふ工合に、根本の信念といふものが發達して來たならば、現在の社會問題に向つては快刀亂麻を斷つが如きものである。（未完）

常德寺老松下偶成　　櫻溪仙史

『定餘欲洗筆、　靈氣襲衣襟、
明月浩如鏡、　老松蔚作蓋
看々現大我、　乃鎖如來心、
長嘯瞰三界、　短吟絶古今』

到作州奥津自動車上所得　　同

『路入孤雲亂峰中、　碧巒嘲吟下天風、
無端忽起陽明句、　神氣浩々似大空』

聖經

人生觀と道德

本多日生

王復那先ニ問フ、精進誠信トハ云何、那先ノ言ク、誠信ヲ行ズレバ便チ度世ノ道ヲ得ン、譬ヘバ山上ノ大雨ノ如シ、其ノ水下流廣大ニシテ兩邊ノ人俱ニ水ノ淺深ヲ知ラズ、長レテ敢テ前マズ、若シ遠方ヨリ人ノ來ルアリ、水ヲ視テ隙カニ水ノ廣狹深淺ヲ知リ自ラ力勢ヲ知リ、能ク水ニ入ツテ便チ過度スルコトヲ得テ去ラバ、兩邊ノ人衆便チ後ニ隨ツテ渡リ去ラム、佛ノ諸弟子モ是ノ如シ、善心ニ精進シテ道ヲ得ルモ是ノ如シ、佛經ニ說イテ言フ、人ニ誠信ノ心有レバ自ラ得度スベシ、世人能ク自ラ制止スレバ五所ノ欲ヲ却ク、人自ラ身ノ苦惱ヲ知ラバ能ク自ラ度脫セン、人皆智慧ヲ以チ其ノ道德ヲ成ス。（那先比丘經、正大藏第二十六卷ノ九）

この一段は誠信に就て更に語り續けたのであつて、獨善主義の考へではいかぬと云ふ事を說いたのである、能く佛教を攻擊する人は佛教は自分の心を淨くするも、社會の爲に盡すことを考へない。自分が地獄に往くのを恐れ、自分さへ淨土に行けば社會國家は野となれ山となれと云ふ教であると云つて非難する、それは淨土宗のやうな狹隘な信仰に對しては或は當つて居るかも知らぬが、佛教の根本の教には左樣な意味は無いのである、菩薩行と云ふのは、言ふまでもなく自分だけ善ければ宜いと云ふのでなくして其の意味は到る處に力說してある。そこでこゝには誠信は單に自己の爲にするのではない、遍く他を利益するのである。それを譬へに寄せて說いて、個人の德を修めるのと、團體の向上を促して行くとの關係が明されて居る最も大切な要文である。

王が重ねて那先に問ふて言はるゝには、「精進誠信とは如何」、唯だボンヤリした誠信でなしに熱烈にその誠信を貫徹し

て行くことになればどう云ふ意味を持つかと問はれた。那先比丘は答へて、誠信を實行すれば、その信念の進みゆく時に「度世の道」と云つてこの世の中を濟度する道を得るのである、その水が次第に流れて、それが段々溜つて河になる、兩方の岸の人は向ふに渡らんければならぬけれども、激流であつて淺いか深いか分らぬ故に恐れを懷いて渡らうとしない、時に遠方から人が來てこの水を見て、この邊が淺いか深いか或は廣いか狹いかを能く知つて、非常な勇を鼓して、その人が先に立つて渡つて見せる、お前等も斯う云ふ風にすれば何も心配はない溺れる事はない、確かにこの水は渡れると云ふ事を實地にやつて見せた、兩側に居つた人は、成程あれなら心配はないと云ふので河を渡ることになる、一人が範を示し多くの人をしてそれに倣はしめる事に依つて、世を度することが出來るのである。さう云ふ譯で普通の人よりは淨い道に立ち善き仕事をする、罪惡を犯し煩悶するやふな危險な生活をしないで、罪惡を犯さず、苦痛に夢はれざる生活を遂げて、其の模範を示したならば、外の人もその通りやつて幸福を得るではないか。「佛經に說いて言ふ」、是は那先經はお經であるけれども、佛の直說でないから那先比丘が佛の說を引證したのである。「人に誠信の心有れば自ら得度すべし」その人に誠信の心があれば罪惡と苦痛とを度り得るのである。「貴人能く自ら制止すれば五所の欲を却く」、所謂自制心を以て安りに起つて來る低き欲望を抑へて、自分の淨い精神に依つて導くことになれば、五つの欲を却けることが出來る。この「五所の欲」とは眼耳鼻舌身より起る色聲香味觸の五感の五つである。自分の身に斯の如き苦みがある、是は斯うして居つてはつまらないと云ふ事が分つたならば、自ら度說する所の方法を執るものである、人が水に落ちた時にはうか〳〵して居れば死んでしまふから、必らず水に浮び岸に上らうとする、人生の生活にもさう云ふ心が當然起るのである。「人皆知慧を以てその道德を成ず」この知慧と云ふのは人生觀である、淺薄なる智慧を成就すれば却つて罪惡を犯す。佛法に於ては道德は淨い人生觀を定めて、信仰の上に修養を積まなければ、精神的に苦みを感ずることが多いから、人生觀を得なければならぬと云ふ事を說くのである。それを領解した智慧即ち人は信仰を打ち立て、修養を重んじて行かなければ、眞の幸福はないと云ふ事を領解して人生觀の上より築き上げたならば、自から道德を修むるやうになつてくる。今の社會の墮落腐敗は餘りに物質に偏した結果であるから、この社會の缺陷を除くには、どうしても先づ個人が自覺しなければならぬ、そこに精神の修養が必要であり、思想の確立が緊要であると云ふことになつて來る。

人生は經濟と法律があればそれで宜いと云ふやうな淺慮が遂に濁濁の人生を造るに至つたのである。玆に云ふ如く領解したる人生觀、正しき智慧であれば、人は自ら道德に進みゆくべきものである。こゝには人生觀と道德の一致を說いて居るので、淨土宗が信心さへあれば道德が要らぬと云つたのはこの人生觀の智慧が曲つて居るのである。今日までの文明に於いて宗教や思想を輕んじたのは、要するに思慮の足らぬ人が多かつたからである。

本多大僧正の獅子吼

人皆菩薩行へ

（名古屋市聯合青年團報より轉載す）

五月十五日、名古屋市聯合青年團は、縣會議事堂で、本年度第一回の講演會を開いた。本多日生師は、「思想問題の歸結」につき、野澤少將は「國勢大觀」につき、長時間熱辯に講演せられた。一千餘名の聽衆者は、何れも其論旨に共鳴し、深く感銘する處があつた。是等の聽講者の日によつて、名古屋市民に傳へらるる思想の影響は蓋し多大なものがあるであらう。かゝて我名古屋は、目にこそ見えね、其發達の基礎を一段一段と着實建設し行くことであらう。

一、何事も思想から

本多大僧正は例の獅子の高い力のこもつた聲で、開口先づ戰後の社會狀態の思ひの外甚く動搖して居る事から說き出し、是等は畢竟國民の思想が健實でない爲めに起るのであると喝破してもともと社會の出來事は、西へ行くも東へ行くも、皆人の思想の然らしむる處であるから、之を善導するも改造するも矢張思想そのものからでなくてはならない。勞働問題は金の問題の樣に見ゆる、パンの問題の樣に見える、しかし之が金やパンで解決が出來ると思つたら大きな誤解である。人は慾の生物である、慾の底には限りが無い、之をパンや金のみで滿足させることが出來るであらうか、政治家經濟學者が此問題を其力によつて解決しやうと考へて居るのは、只問題の表門に氣がついたに過ぎない、只外面に觸れて居るに過ぎない。眞に國民の腹に飛び込み、民衆の思想に喰ひ込んで、そこに健實な解決を與へるのでなくては、何の役にも立つものでない、

二、道德へ哲學へ宗教へ

混亂し來つた目下の思想問題の如き、之が終結はどうしても三個題目の觀點に立つて、始めて正當な判斷が出來ると思ふ。三個の題目とは何ぞ、曰く道德、曰く哲學、曰く宗教之である。

大曾正は之より人の理想によつて創造せられた現實の國家社會は、人間にひそめる良心と理想との支配を受けるのでなくては其等創造の基點は全く破壞し了るものである所以を說き、更に人生問題の根柢に喝破し、是等の永遠の解決は、一は冷かなる理性による覺悟に俟たねばならぬと共に、

一は溫かい情意の上に咲つる大なる力の慰安に俟たねばならぬことを力說し、片々たる經濟論のみでは、到底思想問題を解決することの出來ないことを縱橫に論破せられた。

三、菩薩行を體現せよ

師は最後に宗教の眞諦を喝破して曰く

世には佛教が厭世教であるが如く言ふものがある、之れ眞に其眞諦を解せぬものである、夫れ宇宙の眞如は、活物にして現に吾人の生に響いて居るではないか。佛は天地を照す、佛は人類禽獸草木を活かす慈悲の本體である。赤子は吾等である、佛は之を育む親そのものである。吾等は佛の慈悲に浴して居ることを深く感謝せねばならぬ。之と共に、吾等は吾等赤子の胸にも亦佛の實在することを悟らねばならぬ。赤子の生命は親の生命に相違ない、赤子の本體は親の本體そのものでなくてはならぬ。吾等は佛の光明の下に、自らの佛を體現しなくてはならぬ。凡夫としての日々の業務は、其僅に菩薩の行とならねばならぬ。我と人、互に差別の相を現ずるとは言へ、そこに平等の佛の一面を味はなくてはならぬ。勞働問題も社會問題もこの幻妙な法域に於ては、何等議論の種は存せぬのである。吾等は俗界の生活其僅にて即ち資本家は資本家として、勞働者は勞働者として、其僅そこに天地の慈悲に謝恩感謝し、自ら佛を體現することが佛教の眞諦である。しかし今の所謂喧嘩菩薩や、所謂欲張菩薩ばかりではどんな世になつても頓とラチがあかぬことだ。

大曾正は深遠なる妙法を、卑近に平易に說き來り說き去り、時々諧謔を交へつゝ、かくて聽衆の中に喧と驚き或者の力を握らしめられたのである。

日蓮上人の心血

本多日生

日蓮此ノ道理ヲ存ジテ既ニ二十一年也。日來ノ災、月來ノ難、此兩三年ノ間ノ事既ニ死罪ニ及ベントス。今年今月萬ガ一モ身命ヲ說レ難キ也。世ノ人疑アラバ委細ノ事ハ弟子ニ之ヲ問ヘ。幸ナル哉一生ノ內ニ無始ノ謗法ヲ消滅センコトヨ。悅ベシイ哉未ダ見聞セザル敎主釋尊ニ侍リ奉ラムコトヨ。願クバ我ヲ損スル國主等ヲバ最初ニ之ヲ導カム、我ヲ扶クル弟子等ヲバ釋尊ニ之ヲ申サム。我ヲ生メル父母等ニハ未ダ死セザル已前ニ此ノ大善ヲ進ゼン。但シ今夢ノ如ク寶塔品ノ心ヲ得タリ。此經ニ云ク若シ須彌ヲ接ツテ他方無數ノ佛土ニ擲ゲ置カムモ亦未ダ爲シ難カラズ、乃至若シ佛ノ滅後ニ惡世ノ中ニ於テ能ク此經ヲ說カム是レ則チ爲レ難シ等云々。傳敎大師云ク淺キハ易ク深キハ難シト釋迦ノ所判ナリ、淺キヲ去ツテ深キニ就クハ丈夫ノ心也。

天台大師ハ釋迦ニ信順シ、法華宗ヲ助ケテ震旦ニ敷揚シ、叡山ノ一家ハ天台ニ相承シ、法華宗ヲ助ケテ日本ニ弘通ス等云々。安州ノ日蓮ハ恐ラク三師ニ相承シ、法華宗ヲ助ケテ末法ニ流通ス、三ニ一ヲ加ヘテ三國四師ト號ク。南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經。

文永十年太歲癸酉後五月十一日　（顯佛未來記遺九七七）　桑門日蓮記之

この最後の一段は、日蓮聖人の最も勇ましく述べられて居る所で、日蓮はこの道理を存して已に二十一年、今始めて云ひ出したのではない、佛法は必ず東土の日本より起る、どうぞこの全世界を照すべき佛法が平凡であつたり、貧弱であつたりしてはいかんから、理想的にこの佛法の眞實義を光顯して、世法即佛法、佛法即世法、立正安國と云ふこの偉大なる

精神に活きたる所の佛法、この優越せる文明をして、東土の日本より全世界に及ぼして行かなければならぬ。それが爲めに最初から立正安國論を作り、或は政治家に、或は宗教家に、或は國民に訴へて、益々優越せる文明を作れ、日本の天職は物質的に改善するばかりでは足らぬ、我が建國の精神より見るも「天業を恢弘し天下を光宅する」と云ふに就ては、精神的の偉大なる文明を完成しなければならぬから、其處でこの事を日蓮が主張し來つて已に二十一年になる。これは日蓮聖人三十年の傳道の中に二十一年と言はれるので、あと九箇年は身延であるから、これは佐渡が島に於いてこの事を言はれて居るのである。

所がこの正義の主張には反對が起つて

日來の災、月來の難、この兩三年の間の事、已に死罪に及ばむとす。

幾度か命に及ぶやうなことがあつて、或は龍の口に於いては頸の座に据えられ、松葉ケ谷に於ては庵室の燒打があり、小松原に於ては景信等の暗殺を計れることがあり、その他幾度か死地に陷つたことがあるも不思議に今まで長らへて來たが今年今月は萬が一にも身命を脫れ難きなり。

これは實に佐渡の生活を能く寫されて居るので、段々推し迫つて來た、この佐渡ケ島に於ても反對の者があつて、阿佛房などが密かに庵室を襲うて日蓮上人を殺さうとした、その他段々日蓮聖人の教の感化を受ける者が多くなるに就ては、惡僧共や又其當時の頑固な反對者が日蓮聖人を殺さうと企んで居る。當時は日蓮聖人は夜中寢て居つても風がザワ〳〵吹いて來ると、或は殺しに來たのではないかと思うて眼を覺まされると云うやうな事であつた。今迄は生き延びたけれども、もう今度はどうしても脫れる事は出來ないと日蓮聖人も覺悟されて居た。そうして尙ほ遺言として次の言葉を述べられて居るので

世人疑ひあらば　委細の事は弟子に之を問へ

もう日蓮はこの月殺されて了うであらう、今後法門の事を聽きたいと思うて、日蓮の名に依りて手紙をよこされても、返事は出來ないかも知れぬ、其の場合には教へて置いた弟子共もあるから法華經の法門の事は弟子に聽くが宜しいと云ふ、これは最後の別れの言葉であります。

さうして自らは法悅の喜びを玆に述べられて居る、玆に日蓮聖人の釋尊に對し父母に對し、又弟子信者に對する溫かき精神が見らるゝので、ある者が云ふやうな釋尊を蔑にするやうな觀念は毛頭あるものではない。

幸ひなる哉、一生の內に無始の罪障を消滅せんことよ、悅ばしい哉、事だ見聞せざる教主釋尊に侍り奉らんことよ。願くは吾を損する國主等をば最初に之を導かん。我を扶くる弟子等は釋尊に之を申さん。我を生める父母等には、未だ死せざる以前に此の大善を進めん。但し今夢の如く寶塔品の心を得たり。

如何にも難有い所である、愈々日蓮は殺されて終うけれども、殺されるのは決して嘆きでは無い、洵に仕合せなことに思ふ、人間の壽命は惜いと思うても、何時かは空しく奪はれるものである、然るに一命を法華經の爲めに捧げると云ふ事になればこれ位難有い事は無い。長い間積んだ色々な罪科も法華經の爲に犧牲になつたその一の事によつて、始めなき以前より生れかはり死かはりした長い間の罪科も消える譯である

「幸ひなる哉一生の內に無始の謗法を消滅せんことよ」こんな喜ばしいことは無い。又更に考へれば命を奪られるのは悲しい樣であるけれども直ちに不滅の生命は靈山會上に戻つて、日頃お慕ひ申して居る教主釋尊のお側にゆく事が出來るから、今この日本人として働いて居る日蓮の命は惜しい樣なものであるけれども、頸斬らるれば直ちに釋尊のお側にゆけるから斯んなうれしい事は無い。「悅ばしい哉未だ見聞せざる教主釋尊に侍り奉らん事よ」

尙ほ自分はそれで良いが、自分の積んだ功德はどうか、之を日蓮を迫害したる所の國主等——この迫害を與へて與れるものは即ち善智識である、日蓮に迫害を加へて與れたればこそ自分自からの決心も堅くなり、加之法華行者の身に受くべき法難と云ふものが一々證明されたのである。若しも北條等が迫害を加へて與れなければ、法華經の金言も虛しくなり、未來記も虛妄となり、日蓮の道念も鈍ふことが出來なかつたであらう。惡の立場にあつて北條の人達が日蓮に迫害を加へて與れたことは、感謝に堪えんと言はれた。他の遺文には「少輔房は善知識よ」と言はれ「相模の守は善智識よ」と言つて居られるが、常に日蓮聖人が考へて居られた事で、此の點は如何にも偉大なる點である、普通の者ならば自分を迫害したものであつたならば、「おのれ、彼奴、地獄に落してやりたい」と考へるであらうが　其處は本化上行菩薩の再身日蓮聖人であるから、どうぞ日蓮に迫害を加へた國主等を、先づ一番に助けてやりたいものである、尙我に附きたりし弟子、信者は無論のこと是等も釋尊に申上げて、色々の困難の中を日蓮の教を守つて辛抱して、或は土の牢の寒き中に、或は領分を奪られて乞食となつても正義を守りし者であると云

ふことを一々釋尊に申上げやう。又自分を生んで呉れた父母は、自分が殺されぬ内に只今自分が法華經の爲めに盡し色々積んだ善根功德は、どうぞ之を父母に贈り屆けたいものである。未だ死せざる以前にこの大善を御回向申上げようと言はれて、總ての暇乞ひが濟んで、新くして自分の決心も、また弟子父母に對しても國主に對しても凡べて訣別の言葉を留めてさうして今から長りかへつて見れば、初めて寶塔品の六難九易と云ふ事が分つた、夢のやうに驚氣であるが寶塔品の心が分つた——

寶塔品の心とは、寶塔品には例へば「須彌山と云ふ大きな山を取つて、他の國に擲つ事が出來ても、この法華經を末法に說くことは出來ない。大地を足の甲の上に乘せて天に飛び上る事が出來ても、法華經の敎のために盡すことは出來ない。枯れた草を背中に負ふて大火の中に飛込むことが出來ても、法華經の信仰は出來ない」と云ふやうな事が說いてあつたが、今から考へて見れば、始めは餘り經文は此例が大き過ぎると思うたけれども、成る程一生法華經の信仰を貫く事は容易ならぬ、枯れた草を荷うて大火に入るよりも尙ほ難しと云ふ事は詐りではないと云ふことが、日蓮自分の一生の迫害を經來つて始めて分つた、枯草を荷つて火の中に飛込むと云うやうな事は自分が熱いだけであるけれども、自分が正義を主張すれば、日蓮につきたりし弟子や信者や女房や子供等まで迫害を受ける。可愛い息子が信じても親から勘當を受ける。家來は主人から放逐される、弟子は捕はれると云ふやうな譯であるが、牢に入れられるからやめろとは言へない、牢に入れられて寒くても之を信ぜよと言ひ切る日蓮の心は、實に辛いことであつたであらう、枯草を荷うて自分が一人燒け死ぬ位のことは何でもないと云ふ事が初めて分つたと言はれた。

併ながら傳敎大師の釋に依つて見れば、易いといふ事は淺い事に就てはそれは易いと言へる、淨土宗が易い〳〵と云ふが、易いものは先づ淺いと云はなければならぬ。深い事、大事な事は困難が伴ふのは、當り前のことである。凡そ大丈夫といふものは、易い方に〳〵と逃げてはいかぬ、難い事と難も値打のある事ならば正しき方へと艱難を忍んで正義を立て、迫害に耐へて功業を立てる考でなくてはならぬ。此方に廻はれば樂だといふやうな事ばかり考へたならば、軍人で言へば戰場に行くのは困難だ、留守に殘つて飯炊く方に廻れば樂だ、飯炊くよりは門番、門番より雪隱の番といふやうなことになれば、益々樂な方には廻る譯だけれども、それでは何の功業も立てることは出來ない。其處で日蓮聖人はその困難を引き來つて、自ら慰められたのである。辛かつたけれども併しその辛い內に偉大なる功業を打立てゝ「自ら救はれるのみならず、これに依つて日本國の柱たるべき思想の根本を打立てることが出來、又一切衆生の爲めにも法華經の信仰を與へることが出來るのであるから、思へば愉快なことである。天台大師は釋尊に從うて法華經を支那にお弘めになつた。傳敎大師は天台大師から受け襲いで、法華經をば日本にお弘めになつた。安房の國に生れた漁夫の子である日蓮、身分を以て申せば洵に賤しい者であるけれども、この正法を弘めた上から言へば、釋尊、天台、傳敎に相並んで、法華經を世に弘めた所の一人として後代に數へらるべき者である。即ち三國四師——天竺、支那、日本に於て釋迦、天台、傳敎、日蓮として數へられる者になるかと思へば、如何なる困難の中に倒れても悔むどころではない、今年今月佐渡の島の土となつても、一點心に思ひ殘すことはないと言つて、最後に南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經と題目を以て結ばれてある。

これで顯佛未來記の大體は終つたのであるが、斯くの如き聖人の敎訓は、到底吾々の拙い言葉を以て御紹介することは出來ないので、唯だ日蓮聖人の深い聖訓に基いて、之を繰返して諸君の淸い信仰を刺戟鞭撻せられんことを希望するのである。自分は唯だこの御文章をお取次ぎしたに過ぎないので、この慚えてゐる、熱してゐる日蓮聖人の、今や死を決して述べられてゐる最後の敎訓の活火は、到底自分等の紹介し得ざる所である。南無妙法蓮華經。

東京瓦斯會社の工場講話

東京瓦斯會社に於ては健全なる思想に依て從業員を精神的に敎化するは、會社が國家に貢獻し、社會に奉仕し、及び會社の利益と職工の幸福とを增進する所以なりと自覺し、桑木重役の發起にて上野座務をして調査せしめたる上、正式に重役會議を開いて豫算と方法とを決定し、本多總裁親下を懇請して五月已降每月系統的に工場講話を開始したり。

△五月五日、健全なる自覺、千住製造所△同六日、國民敎化に就て、深川製造所△同七日、修養の要體、深川製作所△同十日、時弊と傳敎、大森製造所△同十日、大詔渙發に就て、芝製造所△六月四日、國民性の培養　淺草派出所△同四日、修養の要訣、大島精製所△同五日、幸福への道、大崎派出所△同五日、報恩の道德、深川製作所△同七日、精神修養に就て　本所派出所△七日、民力涵養に就て　芝製造所△九日思想問題の歸結　深川製造所

教義 日蓮聖人教義綱要（第三十六）

井村日咸

第八章　修　行

第九節　諸種の德行

七佛通戒偈として傳へらるゝ『諸惡は作ること莫れ、衆善は奉行せよ、自ら其意を淨ふす、是れ諸佛の教なり』との佛陀の教訓は吾人の實踐道德の全面を言顯はしたもので、諸惡は作ること莫れとは其消極方面を言ひ、衆善は奉行せよとは其積極方面を言ふたのである、前節六根の懺悔は其消極的方面を詳細に說明したものである、世間には佛教を消極的の教義であると言ひ、莫れ主義杯と批評して居るものもあるが此等は但此半面丈を見て批評して居るので佛教の全體では無い、一面は諸惡を懺悔して其過惡を悔改むると同時に、積極的に衆善を奉行すべきことを教へたものが佛陀の教である、

衆善とは何ぞ、其根本を擧ぐれば信佛の一善であるが、其根本善に於て體得する處あらば、其一善は如何なる場所に於ても光輝を發揮して、所有善美德として實現し來るのである、道德上に於ける諸種の德目は枝葉末節であつて其根本が目醒めねば、如何に多くの德目を擧げて此が實行を强ふるとも効果は擧らない、根本に於て自覺があるならば、自ら其成績の顯著なるものがあるに相違ない、軍人勅諭の中に、忠節、禮儀、武勇、信義、質素等の德目は但一の誠心より發し來るものであるから、『之を貫くに一誠を以てすべし』と仰せられてあるが、此一の誠心が道德の根本善である、佛教には吾人に佛性あるを敎へて、其自覺を促し、靈性の開拓を爲すべく敎訓せられた、佛性は何人も有して居らぬものはない、然し其佛性が目醒むることは必しも一定しない、或ものは容易く覺醒し、或は容易く目醒ない、難易は有るが必ず目醒むるに相違ない、極惡無道の輩なりとも敎ふるに道を以てすれば必ず目醒る時があるに相違ない、法華經法師品に

高原を穿鑿するに猶乾燥せる土を見ては水を去ること尙遠し と知る、漸く濕へる土泥を見ては決定して水に近きぬと知らんが如し　（薬法、二二三）

と說いてある、地球の下には必ず水がある、一丈掘つて出る處もあれば、百丈も二百丈も掘らねば出ぬ處もあるが、絕對に水の無い處は無いと同じで、吾人には如何なるものにも佛性の水は有るけれども、容易に表に現はれるものと、現はれぬものとが有る、水の出るまで挽きず屈せず振り續けて行くならば屹度水が出る樣になるに相違ない、一度水が出る樣になれば、其水は無限に湧出して滾々として盡る期は無い、此が吾人の誠心と稱せらるゝものである、此誠心を開發し得たならば、所有方面に其誠心が働いて善德美行となつて現はれて來る、其根本の誠心を佛敎には、佛性の發現と言ひ、儒敎には明德と稱し、神道には和魂と言ふて居る、名前は異なれども意義は同一である、

此根本善が得られたならば、家庭に於ては父母に對する孝養と現はれ、國家に於ては主君に對する忠節となり、社會的には一切衆生に對する博愛心となり、宇宙的には三寶に對する信仰となつて現はれて來るのである、忠義も孝行も慈愛も皆其根源は一に發するのである、孤獨窮乏のものに對して慈惠救濟の行爲と爲り、實業家としては正直勤勉の商行爲を爲す等、夫婦相和し朋友相助くる等、所有道德的行爲は圓滿完全に之を遂行し得るのである、

然しながら現在の吾人は未だ佛性の發現は爲し得ない、聊か自覺する處ありて發現せんとは志して居るが未だ理想丈で實現はしない、然らば道德行爲は爲し得ざるかと云ふならばそうでない充分爲し得る、未だ佛性の發現は爲し得ざるまでもが、既に佛性を發現せんと努力する處に其佛性に順應せんとする其行爲が、止惡作善の道德行爲と現はれ、佛陀の敎訓に隨順する善輭の心が任運に善美德を發揮し來るのである、

法華經法師功德品に

諸の所說の法其義趣に隨て皆實相と相違背せず、若俗間の經書治世の語言資生の業等を說かんも皆正法に順ぜん

（縮法、三八一）

と說けるは佛陀の教訓に隨順せるものは如何なる方面に向つても實相に違背せず正法に順應するものなるを說ける御經文である、華嚴經には

信は爲れ道の元、功德の母なり

と說けるは信仰は一切德行の源泉なるを說かれたのである、無量義經十功德品に此經に十種の不思議の功德力あるを說く、其第一は此經を信ずるものは諸種の邪惡の行爲を改悛して善美の行爲を爲すに至るを說く、即ち本節に申上げた意味合を說かれたのである、文に曰く、

善男子、第一に是經は能く菩薩の未だ發心せざるものをして菩提心を發さしめ、慈仁なきものには慈心を起さしめ、殺戮を好むものには大悲の心を起さしめ、嫉妬を生ずるものには、隨喜の心を起さしめ、愛著するものには能捨の心を起さしめ、ゝ諸の慳貪のものには布施の心を起さしめ、嬌慢多きものには持戒の心を起さしめ、憤恚盛なるものには忍辱の心を起さしめ、懈怠を生ずるものには精進の心を起さしめ、諸の散亂のものには禪定の心を起さしめ、愚癡多きものには智慧の心を起さしめ、未だ彼を度すること能はざるものには彼を度する心を起さしめ、十惡を行ずるものには十善の心を起さしめ、有爲を樂ふものには無爲の心を志さしめ、退心あるものには不退の心を作さしめ、有漏を爲すものには無漏の心を起さしめ、煩惱多きものには除滅の心を起さしむ、善男子、是を是經の第一の功德不思議の力と名く

（縮法、二九）

と、此經を信ずる信仰の力は、吾人の心身の上に起る邪惡の想を驅逐して善美の德行を積ましむる樣に實現することが出來るのである、日蓮聖人の御遺文中に其折に觸れて弟子檀那に對する道德上の御教訓が顯はれて居るのは此意義に外ならぬ、聖人の御教義を信ずるものは、其教の深義なるに慢じて世間道德を輕視する樣なことがあつてはならぬ、日蓮聖人曰く

人身は受けがたし、爪の上の土、人身は持ちがたし、艸の上の露、百二十まで持ちて名をくだして死せんよりは、生きて一日なりとも名をあげん事こそ大切なれ、中務三郎左衛門尉は主の御ためにも佛法の御ためにも、世間の心根もよかりけりよかりけりと、鎌倉の人人の口にうたはれ給へ

（遺一六四五）

と、世間の心根もよかりけりとは世間道德の輕視すべからざることを御論に相成つたものである、肝銘すべき事である。

第十節　處世の志願

以上各節にお示致したる事柄は吾人の一箇人に就いての修行の方法であるが、吾人は一面に箇人として獨立のものであると同時に、一面には公人として一國に屬し一國組織の一分子を爲して居るものである、そこに對國家的の修行法があらねばならぬ、吾人の修行は單なる一箇人の完成を志す計りでなく團體的の幸福を計り國家全體の進運を企圖して行かねばならぬ、宗教の信仰は箇人に屬するものであつて國家に屬すべきものでない折云ふ議論もあるが是は間違である と思ふ、日蓮聖人の宗教的活動は國家を中心としての運動である、

但偏に國の爲め法の爲め人の爲にして、身の爲めに之を申さず

（遺六〇六）

但偏に大忠を懷くが故に、身の爲めに之を申さず、神の爲め君の爲め國の爲め一切衆生の爲に言上せしむる所なり

（遺六〇九）

と云はれたのは國家中心の運動なるものを申されたのである、立正安國論全篇は此趣旨を詳細に論述せられたものである、聖人が此理想は法華經の結經たる觀音賢經に已人の懺悔を說くと同時に刹利居士の懺悔の法を說かれてあるに基いて居る、經には王者大臣婆羅門（學者）居士（貴族）長者（富豪）宰官（官公吏）等當に慚愧の心を生じて諸罪を改悔すべきを說いて五種の懺悔の法を擧げてある、是は公人としての懺悔法で國家全體の進運を企圖するには公人としての大懺悔を必要とするのである、經に曰く

刹利居士懺悔の法とは但當に正心にして三寶を誇せず出家を障へず梵行の人の爲に惡留難を爲さゞるべし、當に繫念して六念の法を修すべし、亦當に大乘を持つ者を供給し供養すべし、必ず禮拜すべし、當に甚深の經法第一義空を憶

念すべし、是法を思ふもの是を刹利居士の第一の懺悔を修すと名づく

（以下各文省略法五一四）

と、第一の懺悔とは正法を尊信し正法宣傳に從事するものを保護して其任務を全ふせしむるにありと說いたのである、第二の懺悔とは、

父母に孝養し師長を恭敬する、是を第二の懺悔を修すと名づく

と、道德行爲の完成である、學校の修身の時間に講義する計りでは何の効果は無い、國民一樣に實踐躬行せねばならぬのである、

正法を以つて國を治め人民を邪枉せず、是を第三の懺悔を修すと名づく

治國の大本は正法を以つて標準とせねばならぬ、一大德教の建設に依つて、國家統治の大本は確立するのである、日蓮聖人は大德教建設の爲めに努力せられた、國立戒壇建立の理想も大德教の建設を確定的ならしめんが爲めに叫ばれたのである、我國には未だ治國の大本が無いのである、

六難日に於て諸の境內に救して力の及ぶ處に不殺を行ぜしむ、此の如き法を修する是を第四の懺悔を修すと名づく

國境內に於て邪惡の行爲を停止せしむるなり、人心をして平和圓滿ならしめんが爲である、

但當に深く因果を信じ一實の道を信じて佛は滅し給はずと知るべし、是を第五の懺悔を修すと名づく、

と、懺悔の根本標神を擧げたのである、因果を信じ、神佛の實在不滅を信ずることに於て、有効なる成績を擧げ得るのである、先帝の御製に、

目に見えぬ神に對ひて愧ざるは
人の心のまことなりなり
目に見えぬ神の心に通ふこそ
人の心のまことなりけれ
曇りなき人のこゝろを千早ぶる
神はさやかに照し見るらむ

と、何れも神の實在を信じて、其處に吾人の誠心が顯れ來ることを御歌ひに爲つたのであるが、今の御經文と同じ意味合である、固く因果の法則を信じ神佛の實在を信ずる處に、國民の道德は發達し善良なる國風を養成して行けるのである、

以上五箇の懺悔を國民全體が實行する樣にならば國運の隆昌は疑なき處である、然し現下の我國狀に照して之を見るときは前途甚遼遠なるを覺ゆるのである、行詰まれる現狀に於て日蓮主義敎說の聲は喧しけれども、彌實行と云ふ事になつて見ると幾多の困難に逢着して躊躇せらるゝことであらうと思ふ、日蓮聖人が國家中心主義の主張を以つて或人は聖人の場當り主義抔と評したが、日蓮聖人の國家中心主義は其源を佛陀の敎說に發し來たものであつて、決して場當り的敎義ではない、釋尊の敎義が國家中心主義說であることは一切經中到る處に顯はれて居ることである、吾人は佛祖の敎義に導かれて國家を中心として其處に處世の志願を立つべきは、國家の公人としての義務であらねばならぬ。

千葉縣聖祖門下聯合布敎

五月十五日午前十一時より千葉町縣廳公園に於て、縣下殉職警察官追弔法要を修行す。參拜者二百有餘名、大導師山岡管正三十餘名の管員を率ひて讀經し、縣警察部を代表して越川警務課長の機香あり、同日午後一時より縣公會堂に於て國民思想大講演會を開催す。　日蓮主義綱領　顯本學林學監井村日成師　同向

之功德　海軍中將宮岡直記閣下　生活問題と思想問題　文學士　小林一郎先生　世界大戰に就て　陸軍大將大迫尙道閣下　來聽者約七百名にして同地方に於ける官吏學生其他智識階級の大部分を網羅し近來稀なる盛況なりき。

枇杷島統一團分會講演に對する迫害

（反響的惡魔の結果）

統一團枇杷島分會創立講演の概況は前發所報の如くなるが當日本多總裁の講演中悪にもつかぬ彌次を加へたる者ありしも、殆んど他人の嘲語に等しければ一笑に附せられ隨て報道すべき價値だもなかりしなり、然るに本月第二回講演會場の準備に同地團員の着手せんとするや之を惱たおる權門の役分曉達は或は寺院を脅威し或は發起者或は幹旋者に對して其營業職業等に關する壓迫を加ふる等陰險陋劣を極めたり。吾人同士は斯る犬鷲的變行者に對して眞摯に主張を陳さんこと餘りに大人氣なさを感ずるの餘り之が反省を促すべき慈心に出で講演期日を暫し猶豫せんかとも思ひしが同地團員は反て之が爲めに昂憤し是非にとの懇請ありしを以て六月廿日を期し都合上新川町濱島宅に開講することゝなりたり。委細の眞相は次號に詳報する所あるべし。（十六日記す）

雜錄

濠洲に於る社會政策

（大正八年十二月臺灣總督府に於る講演）

海軍中佐　井上清純

一

私は八月の十日に出發して不在でありました事か、僅か四ケ月に足りませぬのに、勞働問題とか申しまするものは、急轉直下の勢でストライキ、サボタージュ、八時間勞働などの事か、單に議論の上ばかりでなく、實際上に於て殆ど現在の我邦を風靡して居りまする樣な感の致しまするのは、彼の資本主義の反動と致しまして、豫て私共の豫期しなかつた事でないでもありませぬが、其の勢の急激なる、其の人心を衝動して居る事の偉大なる點に於て、私は實に一驚を喫したのであります。

而して又新聞雜誌などでは、所謂世界の改造であるとか、思潮の革命であるとか云ふやうな、誠に耳障りのよくない文字か頻はれ、彌か上に人心を惑つて、動もすれば常規を逸せしめんとするやうな有樣であります、隨つて其の際に於きまする識者の言動は、餘程慎まなければならぬ、殊に我國情の如何をも省みず、一知半解の西洋思想の發表と云ふことは、就中最も謹慎を要することと、私は確信致して居るのであります。

而も私か濠洲に居りましたのは、僅かに五十日で、此の短日月に於きまして、濠洲に關する智識か私に出來さうな筈はないから、濠洲に關する智識をお話する譯には行かない、從て御話を申上げ度と思ふのは、濠洲に關する智識ではない、只私の感じましたことを有りの儘に御傳へ致したいと思ふのであります。されば議論の善惡とか、論理の一貫して居るや否や等の問題は、全く別として唯私の感じましたことは、斯樣なものであると云ふことを御聽取願ひ度のであります、尚一言お斷りを致しますのは、私の申上ますのは極めて平凡な事で、又茲にお集りの皆樣も御同意見であることは確信して居りまするか、併しながら、是は公同は曖やかでないと云ふやうな議論の出ないにも限らないと思ひましたので、皆樣の餘た極く高い智識の方々にのみ御聞きを願ひたいと思ふのであります、尚又、私の感じました事を露骨に皆樣に申上ますする事は、總督府から囑託を受けた私の眞の義務を爲して居ると云ふ事も、御了解を願つて置き度いのであります。

扨濠洲と申しまするところは、島と申して宜しいのか、或は大陸と申して宜しいか知りませぬか、實に廣大なる土地で、書物によりますと歐羅巴の四分の三を有て居り、又我國に較べまするとと、朝鮮、臺灣、樺太等の新領地を加へたものの十一倍いくらと云ふ廣さを有て居るのであります、併し現在開けて居る所の地域は、割合に少なう御座いまして、其の東南の部分即ち都會で申しまするならば、ブリスベン、シドニー、メルボルン並にサウスオーストラリヤのアデレードを中心とする地方であります、隨つて私の主として視察致しました所も此等の地方で、殊にシドニーとメルボルンは、私か特に長く滯在した所であります、就中メルボルンに於て稍や智識を得た樣であります、濠洲は皆樣御承知の通り、クインスランド、ニューサウスウエルス、ビクトリヤ、サウスオーストラリヤ、ウエスターンオーストラリヤ、並にタスマニヤの六州から成り立つて居ります、（外に聯邦政府の直轄としてノーサンテリトリがあります）而して各州の權限は、中々强烈でありまするか、又共通的の政務として、聯邦政府の爲すべきことも少なからぬのでありまして、聯邦政府はメルボルンに置かれ、立法並に執行の機關共に此地に備つて居るのであります、而して此のメルボルンに於きまして、私か最も世話になり又能く物を教へて與れた人に、プライムミニスターズデパートメントのオルダーショウと云ふ人と、インターステートコムミッションのプレシデントであるペンデントン及同書記官のブラウンと云ふ三人があります、私の濠洲旅行中最も深き印象を刻まれまして、今日茲に御報告致しませうと思ひまする出來事も、亦この中の一人インターステートコムミッションのプレシデントであるペンデントン氏との間に交渉した談話の一節であります。

抑もインタアステートコムミッションと申しまするのは、聯邦に關する共通的の政務を研究する爲に、特に設けられたる所の機關で、有數の學者及深き經驗を積んだ人のみで組織されて居る、極めて有力なる機關であります、普通我國に於ける委員會などと其の趣を異に致しまして、此のコムミッションに於て研究したるものの多くは、政府の容るる所となり、議會の承認する所となるのであります、又政府は法律を提出せんとする場合に於きまして、其の重要なるものは此のコムミッションに懸けるのであります、而して此のコンミッションは、證人訊問等の權能を有ちまして、眞面目に熱心に研究調査を致しまするが故に、其の調査報告書は、當該事件に對するオウソリチーとして、一般に承認せられて居るのであります、此のコンミッションのプレシデントである、ペンデントンと申しまする人は、年の頃五十五六でも

ありませうか、私共から見ますと一尺計りも丈の高い長身瘠軀温顔の君子人の樣に見受けました、私はメルボルンに滯在中殆ど毎日の樣に此のコンミッションに出入致しまして、色々のことを聴れたのであります、一日サウスオーストラリヤからの歸途ペンヂントン氏を訪問致しました所が、氏の謂はれるには、あなたも寧日なく熱心に色々なことを研究せられた樣であるが、濠洲に於て最も眼に着いたものは、何であるかと云ふ質問を發せられたのであります。この質問に對し、私は眞實の事は判らないが、濠洲に於ては、社會政策が最も發達しては居ないかと思ふ如何やと答へた所が、同君は即座に又意外にも、我國には社會政策等云ふものはありませぬ、とキッパリ答へられたのであります、此の答辯に接しまして、私は恰も電氣に打たれたかのやうに身體に振動を感ずることを禁じ得なかつた、實に此の社會政策が無いと云ふ一言は、眞に千鈞の重みを持つて居るので、濠洲政策の根本義を說明して餘蘊なきものである。

恐らく是程的確に濠洲立國の精神を說明する言葉はあるまい、私は感歎久しからざるを得なかつたのである、夫れ法律の目的は法律なきに歸す、社會政策の目的は社會政策なきに歸す、否社會政策なきにあらず、一切萬事の政策が悉く社會政策なるが故に、社會政策と目すべきものあらざるのみであります。

二

同君は、徐に語を次で曰く、熟ら世界の大勢を觀るに、彼の十九世紀は、正しく資本主義の社會であつた、否此の二十世紀に入つても、尙此度の大戰に依つて、著しく人心は變化し、社會の組織は甚だしく變化し來た樣ではあるものの、尙現在は資本主義の社會たる事を免れぬ、然るに我國即ち濠洲は是と異り、眞に政策の基礎を社會政策に置いたのである、否國家を國家社會主義的に構成したのである、惟ふに從來の立法と云ふのは、人間の間に行はるる所の法律なるに拘はらず、徒らに形式に囚はれ、動もすれば人類を目的とせずに、物を目的とするの誤謬に陷ることを免れなかつた、生命財產の安寧と謂へば、唯其の外形に現はれたる生命財產のみを目的として、其の之れを享有する人に付ては、注意を拂ふ事を怠つたのである、其の結果として、資本主義の惡弊が、極端に暴露し遂に行き詰つて、今日の所謂世界改造とか、思想の革命であるとか云ふ世の中を現はしたのである。それ政治の妙諦は、弱者の救濟にあり、人類が社會を形成する根本の理由は、正に此處にあるので、爲政の局に當つて居るものは、勿論吾人は深く思を茲に致さねばならぬ、幸ひ我國は、疾くに社會政策に着きを措いたが故に、他國に於けるが如き政治の誤謬に陷る事を免れたのである、勿論我國是は、凡ての點に於て是なりとは云はず、併し自分の國に於ては、既來各國に觀るが如き貧民窟と云ひものは觀ることは出來ない、又疾んで醫藥を得ざる者なく、老て食を得ざる者なし、聊か

吾國に誇れる所ありと思ふ、貧君能く此の我國の實狀と、社會政策を觀察して臭れ給へ、彼所に見えるのが我々の誤みを矣にするメルボルンの公園である、あの公園も一度見て貰ひたいと話された、時恰も前の總理大臣であつた、リーキン氏の葬式が行はれ、氏はそれに行かなければならぬと云ふので、話を中ばにして挾れたのであります。そこで私は公園に歩を運んだのでありますが、ペ氏の謂はれた、從來の法律が形式に囚はれて、其の實質を忘れた爲に、社會の缺陷を醸成し、又資本主義の惡弊をも極端に發揮する樣になつたことは、疾くに書物でも讀んだことで、何も今更耳新しい言葉ではないのでありますが、併し特に其の國に於て、又其の人より其の言を聽くに及んで、私は一層の感を深うすることを禁じ得なかつたのであります。

是より先私がペンヂントン氏に對して、濠洲は社會政策が發達して居るのではないかと云ふことを申しまするに付ては、實は聊か人にも聽き、又實際も觀ましたからの事で、シドニーに於ては、其の最も貧民窟と言はれる所の、テリーヒル、ウグローモッロー、メルボルンに於ては、ヒッツロイ、ポートメルボルン、コーリンウッドなど云ふ所を觀ました、勿論此等の地方に於ては、貧乏人がない所でない濠山あります、穢い垢の着いた衣服を着た者もあれば、靴を穿たずに歩行して居る者も濠山見受ました。併しながら大體に於て是の地方の貧民は、我國の貧民とは到底較べものにならない高い生活をして居ると云ふ感じが致したのであります、例へばポートメルボルンに於て、私は角屋と麵麭屋の後を附けて歩きましたが、其の時に貧民窟から買ひに出たお婆さんの買つたものは、兎を二疋と、大分大きい魚二尾と、麵麭五六斤位一時に買つたのであります、是には私も聊か一驚を喫した、邦人とは食物の違ふことも、肉と魚は廉いことも知つて居るのでありますが、併しながら此の一時の買方に驚いたのであります、尙附けて行きましたが何れの家からも、兎を一疋以下買つた所はなかつた、又コーリンウッドに於きましては、貧民窟でピアノの音も聞えました、牛乳なども必ず三合や四合は小僧が昔買つて居る、一寸觀た所では、濠洲の貧乏は、我國の貧乏から觀ると、餘程程度の高いものであると云ふ結論をせずには居られないのでありました。

茲に私の極めて遺憾としたのは、私は二足の草鞋を穿いて居りましたが故に、此の貧民窟の內部に立ち入つて觀ることが出來なかつたのであります、申す迄もなく、私は銀行に勤めて居るので、又濠洲に登るに付きましては、總督府の囑託と云ふ資格になつて居ります、そこで私の旅行免狀は、官吏となつて濠洲の警察に屬けまするのは、總て官吏の資格になつて居ります、御承知の通り、濠洲は戰前の露西亞みた樣に、現在外人に對する取締が中々嚴重で、夫が爲に私共の行動は、一々警察に屬けなければならぬ、住所を變更するときは先づ警察に屬ける、新らしい住所に着いてからも亦屬ける、恰も監視の附いて居る

やうな変であります、而かも一面銀行員でありまするが故に、名誉領事から貰う紹介状や、取引銀行から貰つた紹介は、絶てバンカーとして紹介されて居りました、バンカーと官吏とは抵触するからして、若しも疑惑の材料にでもなると大変なことが起ると思はれるから、警察には到底顔出が出来ません、而も其の警察を頼まなければ、貧民窟の内部を見られないのであります、之が日本の浅草の千束町や、或は私が東京に居りました頃の芝の新銭座宮りならばはい御免なさいで上がることも出来ますが、流石の如き民主主義の國では、貧乏人であらうと、金持であらうと、其の取扱に区別はない、総理大臣のヒュースは、吾等と同等であると云ふ風に、個人の権利思想が、非常に発達して居るのであるから猥りに、人の家庭を覗く事には行かぬ、況してや毛色の違う吾々がうつかりした事は勿論出来ないのである、従つて私は此の貧民の内部の情況を観ることが出来なかつたことは、今日に於ても実に遺憾と致すのであります、併し私の観察が、単に其の外観的観察に止まりますならば、如何に私が大胆でありましても、社会政策は海洲に発達して居るとは容易に言ひ得ないので、而かも之れを言はしめたのは、アデレードに於ける尚来事が一つであるのであります。

記事

五月中の巡廻教化

川島松雄

能仁僧正の巡視

時は五月一日午後四時半、小供會が終る少し前、これは〳〵偉大なる體躯に杖をつき、足駄穿きで、ぬかるみの中から天幕内の事務室に這入つて来た者がある。頭にはトルコ帽を戴き、其杖と云つたら何所の垣根から引き抜いて来たのか、一握りもあるやうな枯竹で、丁度音の其角が、皆鞭タッタたる我うど〳〵てらの有様を観に来たやうな風采であつた。然し誰あらう、此人こそ關西の僧務能仁僧正其人であつた。

今日から統一團に頭本法華宗の宗會が開かれるので、其爲上京したのであるが、會議が終るや否や、うど〳〵てらの情況を視察に来たのであつた。腰掛に腰をかけて手を火にかざしながら、小供會の有様や、講演及び法要の効果等を詳細に尋ね、吾々同人の奮闘をも稱讃して、夜の講演までには未だ時間があるから、何所かで一と休みして来やうと言て行かれた。

突撃のロマンス

五日は朝から曇つて、今にも降り出しさうな天氣であつたが、午前十時頃、総裁猊下から突然出動命令が下つたので勇み立ち、直ちに電報や電話で同人を召集した。品川から事務所へ着した時は早や十二時前回にも手傳つて呉れた『下駄屋の叔父さん』を頼みに行くと、快よく承諾し、直ぐに来て呉れた。それから大急ぎで一千枚の廣告を刷りあげ、高水主任と余と叔父さんと三人、外に小學生六人を引率して出發したのは三時であつた。其中に溝口、大池、中村の諸氏も来られたので益々元氣づいた。午後五時半、一と先づ引きあげて、夕飯を喰べに信易倉庫へ入つた。倉庫には四形の畳が据ゑられ、棚には正宗の瓶がズラリと並べられてある。同人が一方の側に並ぶと「叔父さん」は同席を遠慮して向ふ側に席を占めた。すると今迄吾々をヂロ〳〵眺めて居た、ほろ酔機嫌の一勇働者、頭には豆絞りの手拭ひを載せて、チビリ〳〵と酒酔つ飲んで居たが、「叔父さん」の方へ向ひ「何だいべらんめえ、今日を何日と思ふんだ、而も男の祝の五月の五日に、そんな足袋跣足で働いて、金を儲けて何にするんだ、さあ一杯飲め」とコップに注ぐと酒を注いで差し出した。「叔父さん」はそれを眺めながら「これはどうも有難う御座いますが、實は此の御方々が『うど〳〵てら』と云ふものを創めて、方々を廻つて歩いて、皆さんの爲に先祖の供養や亡〳〵なつた人の法要を無料で勤めてあげるのです、かうして印半纏を着、足袋跣足になつては居ますが皆立派な御坊さん方で、寺に居れば絹の座布團の上に坐つて居られる身分を、かうして雨の降る中をも厭はず、お國の爲、皆さんの爲に働いて下さるのに、どうして私が黙つて見て居られませう、私は勿體なくて涙がこぼれます。平常ならば人から盃を差されて、我へ引〳〵やうな久保田ではありませんが、どうか今日丈は御許し下さい」勇「何だいべらんめえ差した盃を取られねえか」

久「いや取らないと云ふ訳ではありませんが、今申した通りでありますから、どうか今日丈は御勘弁を願います。それに今夜は大留正様も御出になり、其外廿餘名も僧侶方が御出でになつて、吾々の先祖の供養をして下さるとの事、こんな有難い事が又とありませうか、他の御坊さんならば、私等が頼みに行つても、長ら御布施を出さねばいかんと言つて、来ても呉れないのに、大留正様ともあらう御方が、此の雨の降る日、道の悪い所へわざ〳〵お出になつて、而も無料で拝んで下さると云ふ、こんな有難い事がありませうか……」勇「ウンさう云はれて見りやおれも先祖の御祭りをしないである、すまないことだ、久しい前に東京へ出て来て、かうして働いてな、飲んだり喰つたりしてしまつて、未だ先祖を拝んだ事がない……あゝすまない——、（と目に涙を浮べ）實はおれだつてさう思はない事も無かつたので、今日はかうして頭をすつて貰つて来たのだ」と豆絞りの手拭いをとれば成程頭丈は綺麗にそつて居る。久「何か御用があつたならば、どうか私の所へ来て下さい、つまらない者ですが私は此所に居りますから」と久保田は名刺を渡す。食事を終り余等は揃いて其所を出た。

白兵戰

総裁猊下には、南千住の瓦斯會社へ講演に出席せられての帰途、直ちにうど〳〵てらに立ち寄られ、出迎へた一同に「どうも御苦勞」と會釈された、おそれが下駄屋の叔父さんにはどの位有難く感ぜられたかは其後の活動に遺憾なく現はれたのであつた。

彼は私に向つて言つた「川島さん、何と有難い事でありませう、皆さんと一所に働いて居る許りに、常長様から『御苦勞』と云ふ御言葉をかけられた、私はまう死んでも喰り惜しくありません」と感激の精神に満たされたのであつた。然し感激したのは久保田のみかは、感激は活動の元動力である。同人一同、今日こそ総裁猊下の御馬前に勇ましく

き奮戰を試みて、日頃の御慈愛の萬分の一をも報ぜんとの決心固く、直ちに二隊に分れ、一隊は大池氏之を率ひ、一隊は余之を率ひて、兩中宜傳の白兵戰に移つたのである。或は樹の上、或は四ッ角等は苦學の宜傳所となり、爲に入谷町全體に震動するかと思はれる許りであつた。

雨はしと〳〵と降り注ぐ、然し吾等の熱誠は戰をも溶かさんず勢ひ此所に五分、彼所に十分と熱涙を振へば、道行く人も足を止め、二十人、三十人と雨の中に立ちて傾聽し、果てはうど〳〵てらへと押し寄せるのであつた。

此時聽衆の中の身形賤しからぬ夫婦者、「うど〳〵てら」つて何でせうね、と私語すれば通りがゝりの一少年、それを洩れ聞いて「何だい、うど〳〵てらを知らないか、うど〳〵てらを知らない奴は間抜だ」と嘯鳴つて行つた。あゝうど〳〵てらが、斯くも深き印象を少年達の腦裡に刻み込んで居らうとは、我ながら意外の感に打たれたのであつた。

更に事を進めて肉迫すれば、露路の一軒より大鼓の音勇ましく、お題目の聲盛んに聞え、中山の新藤所かと思はれた。大池氏、一段聲を張りあげて之を折伏すれば、大鼓の音も暫し止む。其時、「もし〳〵」と呼ぶ者あり。聲を追りに家の中へ入れば、入口は雨に濡れて水溜り、柱は傾き壁は落ちて、見る陰もなきあばらや、居間も殺間も一つしかない四疊半の座敷には、おら〳〵た道具が所狭きまでに置かれてある。薄暗い電燈の下から、六十餘りのお婆さんが、漸やく身體を起しながら語る。

『お願ひで御座います、どうぞ御聞き下さいませ。實は力と頼んで居りました嫁に、昨年此小供を後に殘して亡くなられ（餘には絵のはみ出たる布團に包まれて、二歳許りの小兒がすや〳〵と眠つて居る。）息子は毎日車引に出ますが、私はこんなに年をとり、五體が利かないので今日の暮しもやつとの事、故つて置いては亡くなつた人に濟まないとは思ひながら、其日の暮しに追はれて、未だお骨もあのまゝ」と指さす方を見れば、戸のない押入れの隅に、粗らしいものがある。「お隣の新藤所へ頼んでお經だけもあげて貰はふと行きましても、來て呉れません。今もお題目が初まつたので。座ながら手を合せ、聲を揃へて拜んで居りましたが、聞けばあなた様は唯で法要をして下さるとの事、何卒拜んで下さいませ』と涙を流し手を合せて頼む。それを聞いた同人は同情の涙に咽び『御安心なさい、今夜は今日蓮と言はれて居る大曾正本多日生聖下が、十數名の僧侶を率ひてお出になつて丁寧に法要を勤めて上げますから』と慰むれば、老婆は『あゝ勿體ない、さう云ふお方様に拜んで戴く嫁は、まあどんなに幸福でありませう、これで嫁も浮ばれます』と嬉し涙に咽ぶのであつた。余等も貰い泣きをしながら其所を出た。

かくして戰ふ事一時間餘、結果如何にと心配しながら、眞諦すると天幕内は殆んど滿員の盛況に、思はずホット胸撫下したのであつた。

法要及び講演

高木主任の開會の辭に次で、餘興の講談が終れば、總裁聖下には十數名の僧侶に圍繞せられて御實前に進み、梵音聲を以て本門の三寶及び諸天善神等を勸請し給ふに、崇高の靈氣場内に滿ち渡り、聞く者恐く襟を正す。觀經より唱題に移れば、參拜の善男善女これに和す。

餘韻嫋々として暗夜の空氣を縫い、靈山淨土もかくやと思はる。

斯くして、法華の經に法要を終れば、總裁聖下には壇上に立たるあゝ其御姿の神々しき事よ、衆は皆歡喜の精神に充されて、聖下の御顏を見守る。聖下は徐ろに御口を開いてうど〳〵てら設立の所以即ち一、現代の要求に依つて生れ、二、本師釋迦牟尼佛の御慈召に依つて之を圖る等より、終來活動の抱負及び惡思潮の深浸せる現代に於て國民の成すべき覺悟等を詳說せられ、萬歲を三唱して散會す。

好果の一節

前回にもさうであつたが、今回もよく手傳つて呉れたので、下駄屋の叔父さんを訪問して、御禮を述べたのは二三日後の事であつた。

家は裏長屋の角から三軒目で、入口から一跨ぎで裏へ抜けられるやうな狭い所に、古ぼけた茶箪笥や火鉢等が並んで居た。それでも嘸居に立派な貴狀の掛られてある所を見ると、今こそこんなに落ぶれては居るが、昔は何の某と云はれた者だなと想像される。病弱らしい青白い顏をした六十許りの御婆さんが喘ぎながら御茶を汲んで呉れた。叔父さんも六十を越えただらうお中々元氣で、下駄に鼻を入れながら語る。久「先日は有難う御座いました、御座敷で管長様から御言葉を戴き有難い御話まで承つて涙がこぼれました』と先夜の事を思ひ出しては喜びの中に浸つて居るらしかつたが、語を續いで語る『それからね管長様は言はれましたぞ、坊さん達は世の中の爲に働かなければならない、坐つて口を開いて雖式の來る許りを待つて居つては、口へ蜘蛛の巣が張るつてね、アハ、、、、、それからうど〳〵てらも一つ許りではいかない、是から段々に面も拡へて、それを毎月八回づゝ動かしたらば、一ケ月に八十回で日本全國の寺を皆な集めたよりも大きい活動をする事が出來るつて、偉いことですれえ何せ費用が大變です、一つ動かすにも餘程かゝるでせう、それが十も動いたらば大變なものだ……』すると空地の方から小供が二三人火の付いた様に泣いてきた 甲『どうしたんだ』乙『又喧嘩でもしやがつたんだらう』とあちらからもこちらも喧騒達が出て來た。叔父さんはそれをなだめて『喧嘩をする奴は皆惡い、泣くな、泣くな、時におかみさん所の喧嘩はまうおしまひか』と一人の妻君に話かければ『あゝそうだよ叔父さんと同じで、喧嘩なんかした事はないよ』と行つてしまふ。

久保田は其後を續いで『川島さん實はね、あの妻君は姑と仲惡くて何時も喧嘩をするんです、昨夜も又始めたから、私が行つてね、うど〳〵てらで聞いた關西の坊さんのお話をして聞かせたんです。すると喧嘩もやんで二人の仲直りが出來たんですよ、それはかう云ふ話なんです、或る所に嫁と姑とがあつて仲が惡かつた、其中に嫁はどうかして姑の命をとつて了いたいと思ふて、お寺へ願をかけに行きました。そして毎晩行つてな、「佛様何卒家の婆さんを早く引き取つて下さい」と願む、すると婆さんも又お寺へ行つて「何卒佛様家の嫁を早く引き取つて下さい」と願む、それが毎晩續くので坊さんはうるさく思ひ、或る晩の事一つ驚かしてやらうと、佛様の後に隱れて居ると、やがての事嫁さんがやつて來ていつもの御願をするから『宜しい、引き取つてやる、其代りまう長い事はないから婆さんを大切にしてやれ』と云ひますと、それを聞いた嫁は喜んで家へ歸つて行きました、其中に婆さんも來て同じ事を願ふから、同じやうに言ふてやると婆さんも喜ん

で踏りました。さて婆さんは思ふに、嫁も長い事は無いとの事、何かうまい物でも喰べさしてやれと、お薩や色々の物を買つて來てやれば嫁の方でも、婆さんは長い事はないから何かうまい物を喰べさしてやれと、和いものを買ふて來てやる、それが二三日續くと、今迄は憎い〳〵と思ふて居た嫁がうまい御馳走を喰べさしたり大事にして呉れたりするので、こんなよい嫁を早く引き取つて貰つては大變だと云ふ事になつて、大急ぎで佛様の所へ參つて前の願を取り消すと、嫁も又こんなによい婆さんを引き取つて貰つては大變だとこれも前の願を取り消して、其後二人は仲よく暮したが、人間と云ふ者は互に思ひ合つてすれば必ず調和に治まるものだ、と云ふお話をして聞かせたんです。すると向ふも感心して、それから喧嘩も止みましたよ……』と得意になつて話した。

あゝ斯くして我等の勞苦も果を結んで行くのかと思ふと、嬉しくて堪らなかつた。其所を辭して表へ出ると、西の空には夕焼の雲が棚を引いて、明日の晴天を思はせるのであつた。

□五月一日雨浸草新谷町。畫小供會二百五十名、夜大人會二百名。講師、高木主任、野口日主師、能仁事一師、中川日史師、餘興琵琶。□五月二日同所日蓮主義宣傳講演會　畫小供會三百名、夜大人會三百名。講師、高木主任、私本堅晴師、中川日史師、金光孝碩師。□五月五日兩同所、三百名　講師、高木主任、本多逸峻猊下。餘興講談、此日多數議員の視察あり。

□五月廿五日、品川。畫、小供會四百名。夜大人會四百名。講師、川島松雄、大森日榮師、笹川日堂師。餘興講談。□廿六日同所、畫小供會四百名、夜大人會四百五十名滿員にて皆天幕の周圍に立つ。講師高木日靖師、笹川日堂師。餘興講談、頂花節。今後十時半、萬歲を三唱して散會すれど、聽衆はさも殘り惜しげに、中々立ち去らず。漸やく外へ出ては、再び御本尊を禮拜して歸り行く樣に、其好果の現はれて有難かりき。

社會部の遠征

社會部は大森町の大原亮氏、川崎町の正法護持會佐久間榮三郎氏、毛見熊太郎氏等の熱心なる信徒の助力に依り、五月廿四日午後七時より神奈川縣川崎町々立女子高等技藝學校に於て巡廻教化講演會を開催す、盛天にも拘らず滿員の盛況。

□聽衆五百名、講師、大原亮氏、川島松雄、笹川日堂師、野澤少將高木主任。餘興頂花節。

品川少年少女會

□四月廿五日本榮寺主催、同寺に於て一四百名、講師、中村藤吉、川島松雄、高木日靖。

□五月十六日、妙國寺主催、同寺に於て　六百名、講師及び手傳人清口會地、手代木靈域、川島松雄、本多直子、齋藤ひで子、中村藤吉齋藤豐次郎、高木日靖。此日東京府見廣保護掛員伊川法了君の視察あり。

統一閻月報

日曜講演　四月二十五日、日蓮主義所感　川島松雄、唯一の父　松尾義城、更に進め我軍の戰士　本多日生。△五月二日　國恩報謝　松本堅晴、斯の如き信仰を、能仁事一、思想問題の歸結と法華經　本多日生。△九日、雨天にも不拘滿員、日蓮主義の本領と屬性、高木日靖、日蓮主義より觀たる政治と宗教　野口日主、思想問題の歸結と法華經　本多日生、△十六日　清堂、苦お唱題觀　明大生本橋利一、希望と法華經　妹尾義郎、信力論　關田日城。△二十三日　日蓮主義提唱　戸谷好雄、自行と化他　大森日榮、身心適悅常得上味　笹川日堂。

開宗會

四月二十八日午後二時より本多大僧正を大導師として一會の骨格開座して開宗の聖日を慶讃し奉り、式了つて記念講演會を開く。

日蓮の氣魄　笹川日堂

更に進め我軍の戰士　本多日生

歸り來りし立教開宗の聖日に當り、清澄山頂の大梵音、初轉法輪に續いて展開せし大聖人が三十年の血涙の御跡を追憶しつゝ、現代所謂日蓮が弟子檀那—師子は百獸に侮ちず師子の子亦かくの如しと勵まし置かれし大聖人の弟子檀那—の行跡を凝視すれば、最心猶經々の音を發する者誰か悲憤の情を催さゞるものあらんや。人に依つて其の觀る所各異るべけれど今一貫して足らざるものは勇猛精進の氣象ならんか智慧は愚なりとも戒德は備へずとも身は不淨なりとも、持せざるべからざるものは勇猛精進の氣魄なり。勇猛ならずんば師子の子にはあらず、精進せずんば聖業はなり難し矣、法師は高邁の類稀を進られて恬々たり、在俗未だ金撥萬能の痴夢より醒めず、擧つて以て忠業の床に眠れるが如し。うたてや開宗の聖節、梵聲は高く響きて都鄙百千の精舍に讀經唱題の聲音はもれ、法堂は高く紫紅の威儀はとゝのへども、法將の獅子吼求むるに少く大德の感化採せども得がたし。東海日毎に大統日輪は昇れども、聖鉢は八裂九離して統合の機運未だ來らず。清澄の山嶺今も猶高けれど身に唱題の眞信その影を絕たんとす。嗚、日蓮魁したり若氣共二陣三陣つゞけと宜ひしを、今果た聖顏地下に何を夢み給ふ。

思はざるべからず勵まざるべからず、開宗の聖節唯一座の法要と二席の講演とのみに終らしむべきにあらず、更に進め我軍の戰士、法將の指令塞として法城に響き渡れり、進まんかな〳〵。

眞下野國佐野の領主天德寺了伯、一日琵琶法師を招いて平家物語を演ぜしむ、法師乃ち那須の與一宗高が扇の的を演ず。近臣皆與一が武勇を歎稱してやまざるに、了伯獨り泣然として聖涙共に下る。近臣怪みて其故を問へば、了伯聽を正しうして語らく「與一君命を奉じてもだしがたく源平環視の中に馬を泳がせて扇の的を射る、一度も仕損んぜんか即ち武門の名折れなれば生死を諸しての業なり。予はその武功を歎ずるの前、彼が悲壯の覺悟を偲びて思はず落涙せり」と。流石に武將の面目躍如たり。

大聖人が清澄の山嶺鬼の森に於ける開宗の壯景を拜する者は須らく又法華色讀の行者にかゝる多難の佛敵に、忍難の誓を定め給へる悲壯の覺悟を感拜すべきもの、若し夫れ眞實之を偲び奉らば誰か感涙の下らざるものあらんや。

題目は强盛に唱ふべきもの、而も又深刻なる悲壯美の添ふべきものにあらざるか「鳥と蟲とは鳴けども涙落ちず日蓮は泣かれど涙ひまな

し」と　暇なき涙を拂ふて強盛に唱ふる題目こそ眞に是れ聖日蓮が弟子檀那の題目たるべきのみ唯徒らに陀羅尼聲を絞りて太鼓を打てる者、又同宗の壯大のみを讃する者は驚ち了伯が近臣の徒なり、若し夫れ了伯の心を以て大聖人が法華經講の聖史を拜せば吾生の信仰に無限の妙味と、佛大の力用との感應するを得んか。唱へん哉南無妙法蓮華經。

大日本救世團思想大講演會

五月二日九段會行社に於て發團式を擧げたる大日本救世團は、越えて三十日午後五時より歌舞伎座に於て救世大講演會を開く。正に是れ思想戰の第一發火にして、都下の人士が耳目を聳動せしめ、定刻既に滿員の殿盛を極めて開されたる觀衆を叩く逆愛の聽衆、屋外に黒山の如く波打てり。理事野澤少將に依つて開會は宣せられ。先づ國歌來の響鐘は高鳴る、徐に頼倒せんとする時勢を宣明し、東洋文明の權威を辯じ、東西思想の調和を論じ、帝國にかかれる救世の大使命を絶叫せられて聽衆先づ動く。續いて同理事本田鎮太郎氏は登壇、金鐵をも貫徹せんず熱誠を以て救世の大信念を吐露せられしは宛然日蓮大聖人が鎌倉街頭のそれも忍ばれ、入り込める無頼の社會主義等が浴せかくる慢罵の聲と相交つて場内次第に喧囂を極む。小林一郎氏代つて信念と力の題下に上壇。帝國現代の戰事上經濟上等の世界的地位の重大事を論明すること頗る到切にして大和民族が國家的大結束と强國なる信力とを發はずんば國危の危來らんと警醒して緊切、續いて大石日應師、中村天風氏、大原子爵と登壇せられ、野次喧騒の裡にも所信を絶叫せられて會は愈々佳境に入る。博士寺尾理事長次いで登壇し東西思想の歴史を論じ尊嚴なる國粹を高説して能く場内を鎮靜せしめられしは流石なり。次に病軀を起して田中智學先生登壇せられ中心主義の題下に時餘に亘つて滔々數萬言能く一切を諦聽せしめられしは當夜の、圧巻、先づ一切が求むるものは平和なりと前提し、平和より調整へ、調整より修養へ、修養より中心へと、眞剣あり諧論あり掌中玉を轉ずるが如し、一轉して我が建國の大理想を明して天業民族の使命を高説し或は基數の矛盾を叩き大に法華經の大眞理を辯揚し、正しき理解と强き信念とを與へられしは感謝の極み。無言の雄辯を以て知られたる當代の偉傑頭山滿翁は徐に登壇し、泰然不動の題下に又無言、低聲聞きとれざるばかりにて半時餘を過されしに、聽衆嘖々として其肺肝より出づる一言を聽かんとせしは蓋し至誠の德なりか、是人を起たしめし事も亦當團の至誠の能くせし所、眞に鬼神をも泣かせしむるは至誠なり矣。最後に團長大迫大將登壇せられ肺肝よりもゆる大日本救世團の大抱負と大信とを侃々と吐露し給ふ。憂國の至情眉宇に現はれ眞に三軍叱咤の觀あり き。既に皇國の稜威は輝き至誠の波は漂ひて不逞の徒對干の報は大方退散して殘れるは皆是れ純忠至愛の同胞、而も猶堂に溢れんばかり、一齊に起立して團長の音頭に和して天皇陛下萬歲を三唱せし時は殿堂も爲に裂けんばかりなりき。思ふべし猶未だ正義の徒決して少からざるを、此徒能く結束して起たば國難を退攘するのみならず往いて廣く一國浮提を光宅するに至らんか。王佛一如聖意の所謂一天四海皆歸妙法の實を擧げんこと又一片の空想にはあらざるべし切に大日本救世團の健闘を祈る。

日蓮主義　**戰士の伴侶**　一部金壹圓八拾錢

民心變動の兆頗る急を告げ日蓮主義の戰士に對し進軍を促すこと切なりこの要求に應じ戰士の伴侶として教義の秘奥を開示せるもの實に本書なり書中論明する所は、思想問題と日蓮主義、宗教信仰の要義、法華經の五大教義、本尊の要義と其歸結、信行の要義と其歸結、得益の要義と其歸結、佛教人身觀の概要、佛教倫理觀の概要の八大編にして記述極めて懇切なり知法思國の戰士速に一本を軍營に備へて韜略を謬ること莫れ。

思想の惡化善化　一部金六錢百部以上五錢の割送料一部金貳錢

本多大僧正撰　**法華經要文**　一部定價　並製　金參拾錢　上製　金五拾錢　送料　金四錢

本多日生師著書一覽

○法華經の心髓　壹圓參拾錢
○日蓮主義の運用　金壹圓八拾錢
○聖訓要義　卷一、二、三、四、五既刊　卷六壹部金參圓　卷七壹部金壹圓七拾錢
○開目鈔詳解　上卷一部　金貳圓　金貳圓貳拾錢
○聖語錄　金七拾錢
○日蓮主義の初歩　金壹圓八拾錢
○東洋文明の權威　金壹圓貳拾錢
○日蓮主義　金壹圓貳拾錢
○修養と日蓮主義　金壹圓貳拾錢
○日蓮聖人正傳　金壹圓八拾錢
○日蓮聖人の感激　金壹圓八拾錢
○日蓮主義の綱要　金壹圓八拾錢
○國民道德と日蓮主義　金壹圓貳拾錢
○優婆塞戒經通解　金八拾五錢
○大乘本生心地觀經通解　金八拾五錢
○國民教化　金壹圓八拾錢
○法幢　金壹圓八拾錢
○戰士の伴侶　金壹圓八拾錢　各送料八錢
○法華經講義　上下　上卷下卷各一部金貳圓八拾錢送料金貳拾四錢既刊　一部金參圓貳拾錢十一卷迄既刊　送料一部十八錢半年前金送料不要
○大藏經要義

購讀希望の方は左記へ申込まるべし
東京市外品川妙國寺内
大藏經要義刊行會
振替東京三一五九六番

目次

尼港事件に就て（時言）……本多日生
一、國家的問題……二、問題の根本……三、敵の所在……四、思想戰の實國奴……五、國民覺醒の秋……六、バルチザンの惡害……七、唯物的文明の災禍……八、日本國の天職……
危險思想に對する警戒……本多日生
思想の善導に就て……佐藤鐵太郎
佛教信仰の正統……本多日生
照顧脚下……山内櫻溪
社會道德と國家道德との調節……本多日生
滿洲に於ける社會政策……井上清純
記事、報道十數件

第廿四年八月號

統一第三百四號
明治三十年二月二十四日第三種郵便物認可
大正九年七月一日發行（毎月一回一日發行）
發行人 東京府荏原郡品川町南品川四百十二
印刷人 東京市麻布区霞町二番地 渡辺秀吉
印刷所 東京市麻布区霞町二番地 渡辺秀吉
（▲本誌定價一部貳拾錢郵税壹錢▼）